菱田海鷗と大垣詩壇（四）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14843

明治大学教養論集　通巻四六四号（二〇一一・一）二五―九一頁

菱田海鷗と大垣詩壇（四）

徳田　武

本稿は、『明治大学教養論集』四五五号「菱田海鷗と大垣詩壇」（三）を承けるものである。

五十二　横浜見学

五日（藤陰）

小雨。明け方、起きて食事していると、思いがけなく竹洲が海鷗を見守りながら、やって来た。彼の病気も治っている。皆、大喜びだ。鉄心殿は、軽装で皆を率いて横浜に行く事になり、下僕に行李の番をさせておくようにした。神奈川駅で待ちあわせ、市街を数十歩行き、右折して村路を進むと、一里ほどで港に到る。港の入り口に関所を置き、人が自由に出入りできないようにしている。で、手形を示して通過し、子安子徳（鉄五郎）の官舎に着いた。子徳は歓迎して酒を出す。太田耕煙もやって来た。子徳は大垣藩士で、幕命を奉じて西洋（蘭語）の通訳官となっている。後に名を浚と改め、読売新聞を始めた人である。耕煙は、もとは長崎の唐通事（中国語の通訳）で、やはり幕府に召されて、こ

こへ滞在している。耕煙は詩・画を善くし、鑑定眼もある。所蔵の書画数幅を持って来て見せたが、すべて唐土から渡った古書画で、最優品は、米芾の水墨の山水画に黄一峯・泰不華・高青邱らの題跋があるもの、趙中穆の羽猟図の横巻に華幼武・文茂苑らの序跋があるもの、その他も新舶来の佳品であり、旅愁を慰めるに十分である。

やがて子徳の案内で出かけ、まず製鉄場を見学した。その有様は、中央に竈を設け、数個の大小の鉄車を連ね造り、それぞれの鉄車の下に鉄器を製造する区域を分ち、石炭を竈の中で燃やすと、蒸気がもう〳〵と上り、軸が回転すると、多くの輪が落ちては上り、それぞれの区域で一斉に着手して造る、というもので、優れた仕掛けだ、と言えよう。元来は西洋人が伝えた技術だが、今は日本人も習熟しているという。

次に木工場に廻ると、やはり製鉄場と同様である。更に西洋館を巡覧した。館の造り方は、すべて長方形の石を畳み重ねて、これに上塗りし、ほぼ我が国の蔵のようであるが、堅固さは、それに優る。二階、ないしは三階、高い物は五階にも及ぶ。構造は宏壮で、土木工事の美を極め、官舎あり、寺院あり、商店街あり、その他、小店・酒場・肉屋など、すべて備わらない物はなく、さながら異国を歩く思いがする。

酒場に行くと、若い女性がテーブルを前に腰かけている。私たちが来たのを見て喜び、皿の料理をつまんで毒見してみせ、食うように勧める。ほぼ、日本語が分り、私たちに、

「おいしいよ、食べなさい」

と言う。

そばに二人の男がいて、洋酒を出して飲むように勧め、甚だ丁寧な態度である。鉄心殿は、なみなみと注いで、飲みほした。私たちも一なめする。酒は桃花酒・桜花酒・葡萄酒とあり、みな茶褐色で、味は甘酸っぱく、それぞれに香りがある。肴は鯵（あじ）と蕃薯（さつまいも）で、すべて肉のスープで烹（に）て、塩や味噌を用いない。鉄心殿が金を出して支払おうとすると、

固辞して受けない。で、二壺の酒に代えて、去った。

子徳の官舎に戻ると、オランダ人スネルが待っている。一緒に飲んでみるが、言葉がほとんど通じない。そこで、子徳に通訳させた。スネルが言う。

「私は貴国の紳士とあまり付合いがありません。礼を失する事が多いでしょう。お許し下さい」

鉄心殿が言う。

「私も貴国の礼を知りません」

鉄心殿は、丁度、米の飯を食っていたので、言った。

「あなたもこれを食べられますか」

「さよう。私はジャワ国で生まれましたが、米を食べる土地なので、幼い時から食べていました」

鉄心殿が言う。

「我が国は米価が極めて高い。ジャワで生産する米を輸入したら、どうでしょうか」

「私の国では勿論、それを望むでしょう」

「聞く事には、アラビヤ国で産する馬は、世界最高だと。その内でも最高の駿馬を選んで、私に贈って戴けませんか」

「承知しました。返礼として貴国の馬を譲って戴きたいものです。私の方は、駿馬であろうと駑馬であろうと構いませぬ。ただ脚の早いのが欲しいだけです。近い内に競馬のゲームがあり、一回に高額の掛け金を出すので、こう言うのです」

やがてスネルは、鉄心殿たちを案内して出かけ、諸館にあまねく出入りして、時には洋酒を勧め、時には賭博を見せ、しまいに打丸（ボーリング）場に行った。場内は、長さ二十間余、十数個の木壺を二十歩向うに層をなして立てて、的とし、木丸で

重さ十斤ほどの物をころがして、勝負を争う。鉄心殿は腕力があるので、ころがすと全て命中する。スネルは感心して、

「うまい」

と叫ぶ。

見終ると、スネルは子徳の官舎まで送ってから、辞去した。

右の横浜の製鉄場や洋館の描写は、大層詳細で具体的である。それは、新たな西洋風俗の渡来と定着という、日本史上に画期的な意義を有する現象を正確に広く伝えよう、という意図がもたらした筆法であろう。さればこそ、小橋橘陰は、藤陰の文を評して、

紀実の文は、過詳なるを厭はず。考工記（『周礼』第六篇）、儀礼の諸篇、法（のっとりならふ）倣すべきに似たり。然らずんば則ち墻を隔てて羶（なまぐさき）を聞くが如く、終に其の旨（うま）きや否やを試みるを得ざらん。

と言う。紀実の文は、細部に徹した具体的描写の筆法でなければ、意味をなさない、と言うのである。

また、藤陰の右の描写は、横浜の西洋風俗を伝える文章の内で嚆矢をなすものであろう。と言うのは、小野湖山が、

余、人の横浜の事を談ずる者を聞くに、往々此の如し。然れども文字に入る者は、則ち今始めて之を見る。諸君は以て快事と為すか、将た以て怪事と為すか、余は評する所を知らず。

と、その早さを指摘しているからである。いかにも湖山の言うように、横浜を見学して、その新奇さを人に面対して喋々と説く者は多くいたのであろう。しかし、文をもって伝えた例は、あまり他に見ない。

以上のように、『亦奇録』上、慶応二年四月五日の藤陰の記事は、日本の転換期における新現象を詳細に、しかも早い時期に伝えた文章として、なか〳〵大きな意義を有するものであろう。

なお、右の横浜見学を題材とした、鉄心の「横浜港」（『亦奇録』上・付録）は、この日、鉄心が受けた衝撃をよく伝えている。

罸旆飈　胡笛飛
排空傑閣金碧輝
長橋直吐虹影起
追風馬車連騎馳
造艦場　製鉄局
幾道焔煙巻雲簇
機設疑鬼非鬼工
即出人智驚人目
我来一見胆先寒
六十州外別一天
君不見絶域遐方千万里
居然縮在一湾裏

罸旆飈（けいはいあが）り　胡笛飛ぶ
空を排する傑閣　金碧輝く
長橋　直ちに虹影を吐き起す
追風の馬車　連騎馳す
造艦場　製鉄局
幾道の焔煙か　雲を巻きて簇（むらが）る
機設　鬼かと疑ふも　鬼工に非ず
即ち人智を出し　人目を驚かす
我来りて　一見し　胆先ず寒し
六十　州外　別に一天あり
君見ずや　絶域　遐方　千万里
居然として　縮みて一湾の裏（うち）に在り

国旗がひるがえり、西洋の笛が鳴っている。
空を押し分けるほど高い建物が黄金色や紺碧に輝いている。

長い橋が虹のような形に架けられており、
風のように早い馬車が数頭立てで走っている。
造船場や製鉄所からは、
幾筋かの火煙が雲のように湧き起っている。
その機械の設置は鬼神の仕業かと疑うが、鬼神が行ったのではない。
ほかならぬ人が智恵を発揮して、人目を驚かす仕事をしたのだ。
私は横浜に来って一覧したが、何よりも先に戦慄した。
日本国六十余州のほかに、ここに別天地があるからだ。
あなたは見ないか、千万里もかなたの辺境の風俗が、
居ながらにして一つの湾の内に縮小されてあるのを。

冒頭の「罽旆」は、この頃の鉄心・海鷗らの詩に頻用される語彙である。元来は、毛織の旗というほどの意味だが、彼らは、嘉永六年頃から洋夷の船に見出される国旗――新風俗の一――を表現する語として、これを用いている、と考える。右の詩には、従来の日本とは全く異なる西洋風景が横浜に出現している事への驚きが詠じられている事は、前述した通りであるが、このショックによって、これまで紅毛夷狄を嫌ってきた鉄心たちも、いささか西洋文明への認識を改める所があったかも知れない。一概に西洋文明を全否定する事の不可なるを、聡明な政治家である鉄心は、次第に悟っていったのではなかろうか。

五十三　華人との交流

そのほかにも藤陰のこの日の記事は、なお続くのであり、今度は全く別の方面における興味深い事柄を伝えるのである。それは、鉄心・海鷗・藤陰たちと中国商人との雅交である。

耕烟が、鉄心殿のためにはからって、華人数名を酒亭に招いているので、一同は出かけた。華人たちは待ち受けていた。李遂川・潘脩儂・労梅石・蔡伯良といい、いずれも広東の人である。容貌は、日本人と似ており、黄髪・紫髯の徒（西洋人）が我らと類を異にするようではない。現今、この地に来ている者は五百人で、彼らはその内のエリートである。華人は、寵愛している港妓三名を呼んだ。勝・染・徳という。酒が数めぐりすると、碁石を探って韻を分ち（原注。妓女に命じて碁石を隠し持たせ、その握っていた碁石を数えて、それで韻を定める。これは華人が教えたやり方だ）、唱和して詩を賦した（以下、詩の唱酬の部分は海鷗の筆蹟によって伝えられる）。

雨中、含雪亭集、得㆓刪韻㆒、即賦似㆓清国諸詞曹㆒　　鉄心

万里相逢東海湾　　万里　相逢ふ　東海の湾
情濃灯影酒光間　　情は濃まやかなり　灯影　酒光の間
荒津風浪函関雨　　荒津　風浪　函関の雨
去国今宵始破顔　　国を去りて　今宵　始めて顔を破る

お国から遥か離れた東海（日本）の横浜湾でお会いします。
灯火が酒に映るのを見ながら親睦の情が深まります。
私たちは風波の荒い渡し場や雨の箱根を越えて、難儀な旅をして来ましたが、
郷里を出発してから今夜、やっと笑顔になれました。

奉レ和ニ鉄心先生原韻一　李遂川

一簾梅雨漲江湾　一簾の梅雨　江湾に漲る
有客招邀小閣間　客有り　招邀す　小閣の間
想是前生曽有約　想ふに是れ　前生　曽て約有るならん
得従海外識清顔　海外より清顔を識るを得たり

ひとしきり梅雨が降って横浜湾に海水がみなぎる日、
客人が我々を小さな酒亭に招待して下さいます。
思うに我々の間には前生から縁があったのでしょう。
海外から来日して拝顔を得るのだから。

以下、藤陰と潘脩儂、海鷗と労梅石、蠡海と蔡伯良、海鷗と蔡伯良などの唱和が続き、更に耕煙が一佳紙を出して鉄心に墨戯を乞うと、鉄心は梅花を描いて、大層妙だったので、清客がこぞってそれに詩を題する事があり、掲げられて

いる詩はすべて三十二首を数える。それらの全てを挙げる事は、大きく紙幅を費やす事になるから、今は避ける。私は近著『近世日中文人交流史の研究』（平成十六年、研文出版刊）において、近世における日中文人の交流の例を俯観したのだが、ここに更に一つの大きな交流の例を知る事ができて、欣快に耐えない。

ただし、これらの詩は、鉄心と李遂川の例に見るように、歓迎とそれへの謝礼という挨拶の作であって、常套的な型にのっとったものであり、特に独自な感情や内容を盛り込んだものではない。それ故に、似たような応酬の作を幾首も読んでいると、退屈を覚えないではない。だから小野湖山も、

諸公の唱酬の諸篇、概ね佳詩無し。但だ匆卒に先を争ひ、酒間に多きを貪る、勢い然らざるを得ず。然れども千古の奇逢、一時の雅興、皆此の詩に頼りて以て焉を伝ふべし。甚し矣詩文の已むべからざるや。其の巧拙、何ぞ論ずるに足らんや。

と評している。詩としては佳作とは言えないが、日中文化交流史の一例としては貴重だ、と言うのである。

ついで鉄心と李遂川とは、筆話を始める。この方は具体的な情報の交換であるから、詩の唱酬よりは実益性があるが、その内の一部を紹介する。この筆話には海鷗と藤陰も加わる。

鉄心　貴国には先頃、朱明の後裔の蜂起があって、戦雲が北京に及んだが、現在はどのような状態か。

李遂川　長髪賊（太平天国）が道光二十九年（日本の嘉永二年、一八四九）に起り、広西省で乱を倡（とな）えた頃は、数千人に過ぎなかったが、後に大禍を醸成した。咸豊五、六年（安政三、四年。一八五六、七）になると、朝廷の戦略が行き渡り、四方を討伐し、南京の賊の本陣をも打破し、賊の首領は誅に伏した。今、残っている者は、流賊数万人で、絶滅できる事は目に見えている。朱明の後裔と言うのは、まったくの出たらめだ。乱賊がそう

いう名義を借りて、愚民を服従させているのです。

鉄心　貴国の貿易は日に〳〵盛んだが、利益が上っているか。また人心は和やかか。現今、同盟している国はどれほどか。

李遂川　貿易地は、詔によって数ヶ所を許可している。必ずしも利益のためにしているのではなく、遠国の商人を憐む意から行っているのである。人心が温和か、という点は、貴国と似たような物であろう。聯盟を結んでいる国は十余りあり、詳細には述べられない。

李遂川　お尋ねしたい、貴国は孔子の教を尊んでいるが、仏教をも尊んでいるのか。

鉄心　水到れば渠成る。（儒教が尊ばれるのだから、仏教も随って尊ばれる、の意であろう）

李遂川　貴国は元来、腰刀を尊重する。その製法は、どこが最も精巧なのであろうか。古の孟労（宝刀の名）のような有名な刀が、今もあるだろうか。

鉄心　刀は、もとより尊ぶものである。だが、それよりもっと尊ぶものがあるであろう。それあってこそ、刀が自分の精（魂）となるのである。

李遂川　貴国の風俗は厚く美しい。詩文を見ると、すべて才能と学識とがある。近頃の名士のうちでは、特に傑出した者は誰か、江戸にはどれほどいるか。

鉄心　近頃の江戸の儒者としては、

佐藤一斎・安積艮斎・大槻磐渓・塩谷宕陰

が居る。

海鷗　こちらから尋ねたい。貴国の名儒には、どのような方がおるか。

労梅石　李棠堦・易棠・彭泰来・朱士奇（この内、彭泰来は、譚正璧編『中国文学家大辞典』に採録される）。

海鷗　文章が達者な人は？

労梅石　広東順徳県の人　李文由。十五歳で探花に及第し、当今の才子だ。

海鷗　画の上手な人は？

労梅石　会稽の人　胡公寿。

藤陰　貴国の学校で人才を育てる教科はどうなっているか？

潘脩儂　学校の種類により、いろいろな方法を取っている。だが、文章・経済・神槍（射撃）・陣法が、その大体である。

藤陰　兄等滞在我横湾、有何緊要的公幹乎。皆奉貴国皇帝之命乎。（あなた方が我が横浜に滞在するのには、何か重要な用件があるのか。誰もが貴国の皇帝の命令を受けているのか。）

潘脩儂　敢て謂はんや中朝の第一流と
　聊か海客に従って群鷗に狎るるのみ
　支離として万里に空しく塗抹す
　何事ぞ先生故侯を識るす
（我々が唐土の第一流の人物だなどと言いましょうや。
まずは貿易船の商人にくっついて、むらがる鷗と馴れ親しんでいるだけです。
遠い異国で出たらめに空しく字を塗りたくっているだけですのに、
どうして藤陰先生は皇帝の事など持ち出すのですか。）

以下、筆話は、歓待しようとしてであろう、鉄心が華客を「岩亀楼」に誘い、蔡伯良らがそれを婉曲に断る、などと余興をもって終熄する。そして筆話の後は、豪飲し、夜半に至って宴散じた。耕煙や子徳は、鉄心や海鷗・藤陰たちを岩亀楼に案内したが、時は既に真夜中（三更）に至っていたので、一同、酔って頽然として華胥に入ったのである。

この筆話を終えての潘脩儂の感想は、

僕、貴邦に到ること已に十年、詩酒歓娯、復た此に踰ゆる無し。手の之を舞ひ足の之を踏むを覚えず。

というものであった。即ち、十年間、詩文を日本の文人と応酬するような機会または相手に恵まれなかった、という事であろう。

また、鉄心・海鷗・藤陰の筆話には、それぞれにその人となりが現われている。即ち、長髪賊の乱や戦法・貿易に関心のある鉄心は政治家的であり、学芸・詩画に興味が向う海鷗は文人的であり、学校教育を尋ねる藤陰は、前年に藩学「学館」の参謀に任ぜられていただけに教育家的である。ただし藤陰は、何か深意を含ませた無気味な質問をも発する。原文で引いたように、それも唐話（中国俗語）を用いてである。その深意とは、かつて明清の鼎革の折、明が徳川幕府に対して援軍を乞うた（乞師）事例があったが、長髪賊の乱の余燼くすぶる当今、清の皇帝が潘脩儂らを乞師の使者として密かに派遣したのではないか、というものであろう。右は推測に止まるのであるが、潘脩儂も、藤陰の質問に容易ならぬものを感じて、韜晦してみせた詩を作る事によって、その場をスリ抜けたのである。小橋橘陰の

脱却し得て妙なり。此れ尋常書生の及ぶ能はざる所。

という評、小野湖山の

事有りて説き難し。乃ち詩を誦して之に答ふ。敏と謂ふべし矣。

という評は、それぞれ右のような潘脩儂の逃げ方の巧妙さを説破したものであろう。

六日（藤陰）

眠りから覚め、欄にもたれて遠望すると、国旗（罽旆）が空中に挙がり、朝日が映じて、紅や白が閃き舞い、拭うような朝晴である。やがて皆起き、酒を飲んでから出発した。神奈川駅に行くと、下僕たちが乗物・馬を用意して待っている。それらを従え、川崎・品川の二駅を経、高輪に入った。大都を一覧して、鉄心殿は句を作った。

自覚人烟属寥寞　自ら覚ゆ　人煙　寥寞に属するを
西征大旆幾時還　西征の大旆　幾れの時にか還る

申の刻（午後四時）、溜池邸に到着した。

鉄心の句は、『亦奇録』上巻付録に収められた「都に入る」詩の転結句であり、その起承句は、

品川駅北独跨鞍　品川　駅北　独り鞍に跨る
七砲台連鎮港関　七砲　台は連りて　港関を鎮む

というものである。この二句は、品川沖のお台場を詠じたものであるが、転結句は、江戸の寂寥が将軍家茂の大坂滞在（長州再征のため）に由来するものである事を言ったのである。

五十四　『亦奇録』中巻

鉄心が江戸に入ると、玉池吟社における同門の藤森弘庵や高島秋帆は既に没しており、大槻磐渓は仙台に、小野湖山は三河に、鷲津毅堂は尾張にそれぞれ在って、吟社の面影もなく、寂しい思いを禁じ得ない。そこで、年下の友人たち

とそれぞれ十日から五、七日の担当で、順番に日記をつけ、興を遣る事にした。だが、その内容は、世間が奇となす事ではない、しかし自分たちは奇とする事である。で、また亦奇録と名づける事にした。

以上は、『亦奇録』中巻の序を布衍したものである。かかる事情により、慶応二年四月七日から、まず鉄心が記すのである。

四月七日、戸田氏共（うじたか）公に表御殿で謁した。公は去年、始めて家督を継ぎ、十三歳になったばかりである。公は膝を進めておっしゃった。

「万事、そちらの導きを頼むぞ」

言葉も気持も丁寧で、大人のようである。感泣して退いた。

八日、公は黒川政博をして芸州広島に赴かしめた。広島は、長州再征軍の屯営所である。鉄心は、命令を受けて、辞令を草した。

九日、公は、野村藤陰に『詩経』を講じさせた。

十日、暴雨。

十一日、公は戸田淡路守・戸田三郎四郎の二公族を招いて、ともに乗馬を後園に試みた。鉄心も陪する。この日、太田耕煙が清客のもたらした書画五幅を郵送してきた。呉夢九の蓮図と王継賢の芦雁図は佳である。

海鷗は、この日、春木南溟父子を訪れた。酒を飲んでいると、南華は西洋製の泥蚕を示した。長さは四尺弱、周囲は一尺強である。

十二日、海鷗と菅竹洲をして永井磐谷を訪れ、耕煙の郵送してきた幅を鑑定させた。磐谷は言う。

「夢九の蓮は、風韻の点でまさっている。継賢の芦雁は、少し趣は乏しいが、やはりなかなかの物だ。」

この意見は、私（鉄心）のそれと大体合致するので、購入することにした。

藤陰曰く、この日、沢野蟠海を連れて安岡嶺南を訪れた。嶺南は川越藩の儒者で、近ごろ居を我善坊谷（麻布）に定めた。幽邃愛すべき所だ。厩橋（前橋）築城の事を語り、こんこんとして止まない。

盤谷は、通称は（犀）助、字は重光、名は喜暉、表六番町高井家中という（『近世人名辞典』）。また嶺南の饒舌については、鷲津毅堂の頭評に、「嶺南は談客、其の口角に沫を生ずるの状、想ふべし」と、これを保証する言がある。

十三日、力士の鬼面山が訪れた。鉄心は豚を烹て、痛快に飲んだ。

右の記事について、土井聲牙の頭評に、「鉄公の本色は此に在り」という。鉄心は大兵漢で膂力が強かった、というから、相撲取りを愛し、また彼らとも互角に飲めたのであろう。

十四日、傍島良中と千秋老泉は、江戸を出発した。日光の東照宮に詣でてから、家に帰るのである。

十五日、久しぶりに晴。街頭を行くと、大層寂しい感じを受ける。一店主が訴えて言う、「将軍が西国に行かれ、列侯が領地に戻ったので、江戸の町人は、その為に商売あがったりで、ほとんど生計の術がありません。ただ横浜の貿易に関わっている者だけは、この心配をまぬがれております」

夕方、怒雷たちまち発して、夜になると珍しく寒くなった。

五十五　佐久間象山の妻

十六日、辰の刻（午前八時）、生徒を学古楼に集めて、『易経』を読む。藤陰を会頭とし、海鷗を副として、以後、日課とする。午後四時、肥前僧相音が来見、酒を命じて禅を談じた。松代藩士小林畏堂・竹村可医もやって来た。共に二十年前からの相識である。のんびりと懐旧談をした。可医が言う、

「私は主君のお件をして京都に行く。あなた（鉄心）は近ごろ京摂におられたので、時事を伺いたい」

鉄心は筆硯を出して、三絶句を書して与えた。

その第一首は「鴨涯」、第二首は「桜祠」と題する京都と大阪を題材とした七絶であるが、いま第一首のみを掲げる。

事能果断志能廉　事能く果断にして　志能く廉ならば
偶爾風顛也不嫌　偶爾に風顛なるも　也た嫌はず
二月京城春若海　二月　京城　春は海の若し
夕陽釵影上珠簾　夕陽　釵影　珠簾に上る

事を断行し、その際の志が清廉であるならば、
時たま馬鹿をやっても許されるだろう。

二月の京都は海のように広大な市街一面に春の気配がみなぎり、
夕日が指す頃には、妓女の釵が美しい簾に映るようになる。

清廉果断でさえあるならば、たまには遊蕩をするのも許される、というのは、いかにも鉄心らしい信念を披露したものであるが、しかし、この詩は、可医の質問には真当には答えていないのである。すなわち、尊王か佐幕か、攘夷か開国か、というような時事問題を人に問われると、右のようにはぐらかした答えをすることによって、真意を露呈しない、というのが鉄心の常套的なやり方であり、そのように韜晦する事によって、身の危険を避けるのである。第二首の「桜祠」も、艶っぽい絃歌の巷の水に大阪城の姿が映っているというような韜晦の詩であって、生臭い話題には立ち入っていないのである。

十八日（藤陰筆記）、午後四時、鉄心殿は鳥居圭陰・海鷗・竹洲および藤陰を誘って、翠迂老人を訪れ、その月白風清楼に飲んだ。

鳥居圭陰は、鉄心の親友であった鳥居研山の一族（弟か）であろう。

十九日、桑名の松岡諒蔵と荘内の都丸鉄弥が翠迂老人を介して、藤陰に就いて学ぶ事を請うてきた。ついで瑞枝女史もやって来て、藤陰に請う。藩法では、女性が藩邸に入るのを禁じているので、断った。瑞枝は林氏で、松代藩の佐久間修理（象山）の室である。修理が暗殺されて、家が断絶されてからは、実家に帰っている。

鉄心曰く、象山は嘗て私に語った。

「自分は妾を畜える際には必ず二人にして、それらをして互いに嫉み忌ましめる。これが自分の家を収める秘訣だ」

私がこの言葉を味わうに、天下を御するのも亦た同様だ。ああ、象山殿の経世済民の一斑を窺うに足りる。

瑞枝女史は、象山の生前には順子といい、勝海舟の妹である。だから実家に帰ったからには勝氏に戻る筈であるが、藤陰はなぜか林氏と言っている。その間の事情は、今は不明である。この瑞枝女史が藤陰に漢学を学ぼうとしたことは、小林畏堂や、竹村可医が象山の相識であった縁に拠るのであろうが、宮本仲著『佐久間象山』（昭和七年、岩波書店刊）「先生と夫人」にも記されていない事であって、珍しい事実を伝えているものである。また、象山が妾を二人畜える事を治家の訣とした、という事は、前述した如く、元治元年三月二十六日、象山が京都に赴く途中に大垣に立ち寄り、海鷗の家で鉄心と対談した際に聞いたことなのであろう。確かに象山にはお蝶・お菊など二人の妾が並存していたし、京都滞在中にも「一人ふたり」妾を置く積もりであったことが、前掲書「先生と其側室」に述べられているのである。

二十日、海鷗・竹洲と一緒に不忍池に遊ぶ。正午を過ぎたので、皆、腹をすかした。海鷗は餡巻餅を好む。小倉庵がこれで有名なので、私達をそこへ誘った。が、海鷗は、「小倉」を「翁」と思い込んでいたので、翁庵に入って餅を頼んだ。女中が言った。

「ここは酒場です」

海鷗はやや暫くいぶかしむ風だったが、

「間違った」

と言った。一同どっと笑って立ち去った。たぶん翁と小倉と、読みが近いからであろう。

二十一日、例によって講筵に上り、経書を講ず。それから先公（戸田氏彬）の遺影を拝観した。藤陰は先公に侍講する事が久しかった。今、その遺影を拝すると、思わず涙がしたたる。この日、南郷一堂が書画会を柳橋のある料亭で開いた。鉄心殿は圭陰・海鷗・竹洲を連れて出かける。私も従った。ついてみると、俗客が雑沓しており、甚だ殺風景に感ぜられたので、上がらないで立ち去った。舟を命じて鉄砲洲に到り、木下逸雲の寓居を訪れた。久しく歓談する。逸雲は七十歳ほどの老人で、仙骨秀でており、態度が洒脱で、都下の画工の比ではない。その画が神に入っているのも当然だ。やがて呉寿英が製した筆数箱を出して見せた。鉄心殿は喜んで、

「自分はこの筆を好んで、以前、あまねく京摂の間に捜し求めたが、手に入らなかった。ここで得られるとは思いがけない」

と言い、数十本を求めなさった。他の者も皆これを求め、十三円の謝礼を与え、辞して出で、晩に藩邸に帰った。

逸雲は長崎の画人で、この慶応二年、江戸に出たが、八月四日、横浜からの帆船で長崎へ帰る途中、消息を絶った。年六十八。

五十六　『万国公法』

二十二日、夜、諸君と一緒に『万国公法』を楼上で読んだ。

『万国公法』とは、米国のホウイートンの『インターナショナル・ロー』を米人丁韙良（ウイリヤム・マーチン）が

漢文に翻訳して、『万国公法』と題し、同治三年（元治元年）に出版したものである。これが翌慶応元年に我が開成所で和刻刊行され、それに拠って邦人は初めて各国の交通に条規のある事を知り、識者は争ってこれを読むようになり、後には『和訳万国公法』『万国公法訳義』（堤殻士志訳、慶応四年刊）などが行われるようになった。こうした風潮に逸速く乗じて、大垣藩の人々も和刻本を読みあわせたのであろう。こうした勉強会を踏まえてであろう、鉄心は「万国公法を読む三首」を詠じている。この詩は『鉄心遺稿』八の巻頭に収まり、それは慶応三年から明治元年にかけての詩が配置されている所であるが、実際に作ったのは、この慶応二年四月二十二日から程遠からぬ日であったろう、と考えられる。これらの詩には『万国公法』に対する鉄心の感想が表明されているから、三首ともに掲げておこう。

五州治道有何異　五州の治道　何の異か有る
明月芦花秋一般　明月　芦花　秋は一般
美国書生優弄舌　美国の書生　優に舌を弄し
無為天法落人間　無為の天法　人間に落つ

世界の五大州において、治め方には何の異る事もない。
秋になると、明月が輝き芦花が開くのは、万国に共通だ。
米国の書生ホウイートンが巧みに文を舞わしたので、
自然に天によって行われるべき法が人の世の中に現前した。

民心帰一国常寧　民心　一に帰せば　国常に寧らかなり
燮理誰持軽重衡　燮理　誰か持す　軽重の衡
唯有翕然公好処　唯だ翕然として公好の処有れば
与他造化俱通行　他の造化と　俱く通行す

民衆の心が一致すれば、国は常に安定である。
だが、いったい誰が軽重の判断を下して国をやわらげ治めるのだろうか。
ただ公衆の良しとする処に一致しさえすれば、
自然のままに全て天下に行われる事だろう。

多事説公又論律　多事　公を説き　又た律を論ず
甘心所服是何名　甘心　服する所　是れ何と名づく
奔流曲直百渓水　奔流　曲直　百渓の水
注到大洋一碧平　注ぎて大洋に到り　一に碧平なり

多方面な事柄に亘って公論を説き、また法律を論じている。
心に納得して従えるものを何と名づけたら良いのか、公法と言うべきか。
多くの川の水が曲直して奔流し、

大海に注ぎ込めば、一面に紺碧で平らかになる。

右の三首の詩の内、第一・二首は、『万国公法』について、さほど感心していない態度を表明したもの、と読むことができる。すなわち、第一首は、どこの国でも共通する普遍妥当的な法思想を文章化したものに過ぎない、と言うのであり、第二首は、万人が妥当とする政治的・法的判断を下しさえすれば世は治まるのであって、強いて国際法を立てるまでもない、と言っているかのように読めるのである。ただし、第三首だけは、『万国公法』が多岐に亙る国際法的問題を一書の内に整理した功績を認めている、とも読めるのである。なお、第二首、転句の「公好」は、『万国公法』一・第一章「釈義明源」第七節「性理之一派」に用いられている語であり、第三首承句の「甘心所服」は、同じ箇所に用いられている「甘服」に基いた句であろう。

五十七　倉敷代官所襲撃事件

二十三日、海鷗は少しく不調で、来られない。そこで休講にした。この日、梅雨に入ったが、晴れている。

鉄心曰く、この日、三上侯に謁した。侯はお若い時、武道に達し、特に日本の古典に明らかである。嘗て大阪の市尹となり、大塩氏（平八郎）を討つのに功があった。後、幕政に参加すること二十五年、今は致仕しておられる。齢は七十を越えているが、矍鑠として少壮者のようである。話題は備前中倉敷の事件に及んで、腕をひろげて大歎息する。

三上侯は、遠藤但馬守胤緒である。大垣藩主戸田氏教の三男で、享和元年（一八〇一）十二月、近江国野洲郡三上藩

主遠藤胤富の養子となり、文化八年（一八一一）六月、家督を継いだ。天保四年（一八三三）、大坂城玉造口定番となり、八年二月、大塩の乱鎮定に活躍し、三老中連署の感状を賜った。同十二年、若年寄に任ぜられ、幕府のために海防や外国事務の掛りとなって、いろいろ役目を果たしている。明治三年（一八七〇）没、享年七十八。時に七十四歳である。この慶応二年の四月九日、東軍が広島に留っている事を聞き、長州藩の第二奇兵隊の立石孫一郎ら百余名が軍律を破り、倉敷代官所を襲撃し、代官桜井久丞が笠岡に遁走する、という事件があったが、胤緒は、その不甲斐なさに憤慨したのであろう。

二十四日、家への書翰を書き、官便に付す。

二十五日、客が来って時事を談ず。痛快。酒を命じて、思わず酔倒す（以下、竹洲・海鷗とともに猿若二番町の劇場で『伽羅先代萩』を観るが、それは夢であった、と記す）。

二十六日、鉄心殿は老公戸田氏正の夫人（薩摩藩主島津重豪の娘）のお伴をして、筑前侯（黒田長溥）の邸に遊宴に赴いた。

二十七日、海鷗筆記。鉄心殿は軍簿の草稿を作った。

軍簿とは、広島の幕府本営に派遣する大垣藩兵の名簿を言うのであろうか。

二十八日、鉄心殿は、戸田淡路守（氏良、大垣新田藩主）の公邸に赴く。公は、長州人を載せる檻車（囚人護送車）を広島まで護送する命令を受けており、鉄心殿はそれに関っているので、拝謁するのであろう。

「長人檻車」とは、倉敷で反乱した奇兵隊の者たちを広島の本営まで護送する車を言うのであろう。

二十九日、鉄心殿は、淀老公（先君戸田氏彬の妻雅子の実父、稲葉正守）の招きで、渋谷の藩邸に赴いた。その庭園は極めて幽邃で、三笠閣という亭があり、大層古めかしい。大猷院（徳川家光）が贈った所だそうだ。

藤陰曰く、この日、平田大角（鋏胤、秋田藩士）を秋田侯の邸に訪れ、江馬活堂（蘭斎孫、大垣藩医）が托した書簡とその書『排仏論』を渡して、帰った。

五月一日、曇、夜、藤陰侍講の官舎に集り、韻を分って詩を賦す。

二日、急雨、荷葉に点じて音をたてる。たちまち晴れ。鬼面山が鉄心殿と諸人を迎えて、相撲をその家で見せた。姫路・会津・彦根・松山の四藩士もまた来り会した。

三日、晩に散歩、家々で女児が月を拝んでいる。

四日、富士山が空中にそびえ、朝日がこれと映じあっている。晴天が人を元気にする。海鷗は郷土を出てより、微恙が発したり癒えたりしていたが、この日、全快した。で、本所の妙源寺に行き、先師艮斎先生の墓に詣でた。夕日が常盤橋（千代田区大手町二丁目東部）に指す頃、城の堀に沿って帰ると、処々に鼓笛が神社のそれのように聞える。兵を訓練しているのであろう。

五日、書斎が落成し、転居の宴を開く。鉄心殿が海鷗と竹洲のために一軒を新築されたのであり、広さはやっと一丈四方ほど、しかし机上に雲煙を迎えて、不忍池の蓮の香りが窓から馥郁として入り、愛すべき雰囲気がある。飲んでいる間に鉄心殿が「不息舎」という三字を額に書いた。人々がすべて詩画を作って祝賀してくれる。洵に客中の一快事である。この日、火雲が富士山にかかり、暑気初めて盛んである。

七日、宇野南村の訃報が届いた。南村は我が藩の詞宗で、甚だしく痛ましい。

南村は、四月二十五日に病没した。鷲津毅堂は頭評で、「南村は二十年来の旧識たり。一読凄然たり」と評している。

八日（竹洲筆記）晴天に風薫る。鉄心殿にお伴して、芝浦に行き、漁師の家の二階で軽く飲んだ。相模・房総の海と山が欄から一望できる。魚はすべて活潑で、刺身にすると極めて新鮮である。

鉄心曰く、この日、某藩の士二名が来って、時事を談じた。其の論は痛快である。飲んだのも、その余勢を駆ってである。

十日、鉄心殿は藤陰・海鷗二兄を連れて、若山勿堂博士を訪れた。

勿堂は、名は拯・用拯、字は扛吉。阿波の人。佐藤一斎に学び、岩村藩儒となったが、文久三年、昌平黌儒官となり、勝海舟・板垣退助・土方久元などを教えた。翌、慶応三年没、年六十六。『亦奇録』中、付録には、藤陰の漢文「月喩」が収まるが、それは沢野蠡海が勿堂に入門するに際しての激励の文章である。

十一日（鉄心筆記）、昼寝をして奇夢を見た。ふと覚めると、胸中にもやもやとした想いがあり、悶々とする。そこで、藤陰・海鷗・竹洲の三人を連れて、舟を海口に浮かべた。濁波が雨を伴って怒号する。そこで深川の酒楼に飲み、暮に藩邸に帰った。灯下に『碧巌録』を読む。

鉄心を悶々とさせた奇夢とは、どんなものであったろうか。

十二日、藩士の撃剣を士道館において見る。晩に小酌、江戸人が注文している紙絹を十数幅揮毫する。清客蔡伯良が贈った副筆を試してみると、甚だ用に適う。

五十九　海鷗の金沢旅行

以下、五月十三日から十八日まで、『亦奇録』中巻は、上下二段に分かって記される。それは海鷗と竹洲が横浜・金沢旅行に出かけ、その間、江戸に留まる鉄心と行動を別にするので、上段には鉄心の消息、下段には海鷗・竹洲のそれと、各自によって別々に記されるからである。そこで本稿では前に鉄心の消息、後に海鷗らのそれを記す。

十三日、鉄心は晩酌して寝る。夜半、蚤が多くて眠ることができず、転々として明けるのを待つ。明けると、全身に星が布いたように紅纈紋（赤い斑点）ができている。思うに、いつもは海鷗・竹洲が鉄心の傍らで寝ているのに、この夜は二人が不在なので、蚤が鉄心の一身に集り、貪り食われたのであろう。

海鷗は、竹洲とともに溜池の上屋敷を立って品川に出、初めて田植えを見た。横浜に着いて、子安子徳の病気を見まう。子徳は病床に在って歓待した。太田耕烟を訪れ、夜、吉原街を歩く。楼閣が立ち並び、灯光は昼のようだ。蛮客の笑を買う者が、雑沓して肩を触れあう。この夜、雨が落ち、後、晴れて月光が冴え渡った。

十四日、郷人田雨石が来って、鉄心に家信を伝えた。

海鷗は、再び耕烟を訪れて、藤堂凌雲にめぐりあった。耕烟は、舶来の書画数幅を見せる。梅月図が最も秀でているが、誰の物かが分らない。正午近く、耕烟は海鷗と竹洲を案内して李遂川、蔡伯良の寓居に至った。両人は大層喜んで、茶と人面子（美人桃か。広東産）を供した。海鷗は、鉄心が託した書翰と土産数品を渡す。急いで立ち去ろうとすると、李遂川が留めて離さない。が、海鷗たちは、その日に金沢に行く予定なので、固辞して立ち去った。港を出て左折すると、野道がくねくねと蛇行している。雨が急に降り出し、蒔田村に到ると、道がある。鎌倉街道だ。関村を通過して二里ばかり、山道はぬかるんで、歩くのに甚だ難渋する。能見堂に登ると、雨景がすばらしい。時に老婆が言う、

「南の海の波音がひどく悪いです。暴風の前触れでしょう」

坂の下が、もう金沢だ。旅籠屋に宿る。一晩中、大雨の音がする。

藤堂凌雲は、名は良驥、字は千里、別号は痴仙、通称は勝太郎。伊勢津の人で、梅花の男。山本梅逸門の画家で、下谷長者町や向島に住した。明治十九年十一月三十日没、年七十八。鉄心が託した書翰は、『亦奇録』中巻付録に収まる「李遂川に与ふ」であろう。それは四月五日に含雪亭で得た李遂川らの書の秀潤な事を述べて、更に鉄心の別墅無何有荘の外門が近ごろ成ったから、李遂川と蔡伯良の書を得て、それらを扉の外と内に彫りたい、という意を伝えた書牘である。

十五日、暴風雨、鉄心は、一日中、来客が無いので、近ごろ筆録した『異聞録』を点検した。

海鷗は、大風雨のため、一日、金沢の宿に滞在した。

十六日、鉄心は激しい下痢に数次みまわれ、枕に就いて呻吟した。彼は春の初に京に入り、ついで浪華、そして江戸

に来って、今年は早くも百ヶ日を経過したが、この夜初めて酒杯を挙げなかった。

海鷗は、よく晴れたので、早朝出発して、金竜院に登る。この地は金沢の絶勝と称されている。海鷗評して曰く、「衆景畢く露はる。能見堂の雨眺に及ばず」と。すぐに出て、また南に行くこと二里、山が廻り、渓が転じ、登るかと思えば降り、とうとう武蔵と相模の界に到った。阪峰が隆起し、岩を割いて道を通じている。いわゆる朝比奈の切通しである。

阪を越えると鎌倉である。広さは数里に過ぎず、四面みな山である。八幡宮に詣でると、堂閣は立派だ。源頼朝の墓にさしかかる。頼朝は武略に優れ、威勢は四海に震ったが、今は一片の残碑に過ぎない。古今を俯仰して、久しく嘆息した。大塔宮の土牢に謁し、呆然として往事を想うと、義憤の涙がしたたり落ちる。竹洲もまた泣き伏していて起き上る事が出来ない。ああ、足利氏の大逆無道は責められずに、親王をしてかかる悲惨に至らしむるのは、天道も非なる時があるからであろうか。時に日はもう正午を過ぎたが、膝まづいて拝礼し、敬を尽くしてから去った。

当時（鎌倉時代）の諸公の邸址を尋ね、更に建長寺・円覚寺やその他の遺跡を数えられないほど廻った。比企谷を越え、稲村ガ崎を俯瞰して、新田義貞の苦戦に感じた。由比が浜は海中に突き出ており、今度は三浦氏の事（北条時頼によって滅亡せられた事であろう）を想った。竹洲と話ながら歩き、海に沿って西に行ったが、これが七里ガ浜である。南に安房・伊豆の山を望むと、大層よい眺めである。そこからは沙路で、これを踏むとザクザクと鞋を噛む。突然、大きな島が海中にそびえているのが見えるが、いわゆる江ノ島である。岸を隔てること半里、平らな沙が広がっている。潮が来ていれば、舟で渉るのだが、丁度引き潮なので、鞋の痕を見つけて歩いた。岸に着くと、茶屋が軒を連ねている。で、荷をおろして一宿を予約し、更に進んで石段を登り、弁天宮を参拝した。宮は二つあり、上方のそれが殊に清潔である。そのまま竜窟に至り、燭をともして入ると、風が浪に激しく吹きつけ、恐ろしくて留まる事ができぬ。すぐに出

て、高い岩の上に膝まづき、大洋を一望すると、衣服や袂がはたはたとなびかされ、世にまたとない懐いがする。夕方、前に約束した宿に泊る。魚ははなはだうまく、酒を注文して痛飲した。やがて金色の光が簾にさすので、海鷗が驚いて戸外に出ると、月が海の中央から出るのである。思わず大声で

「すばらしい」

と叫んだ。みるみる青海原が銀世界に変り、西の方を振りかえると、富士山が空中に兀立していて、まことに偉観である。

六〇　「街触書」の漢訳

十七日、鉄心は留守居役鳥居圭陰の家で「新令記」を見て、その一、二を摘録し、漢訳している。それは、次のようなものである。

我が練兵の西洋の法に擬する者は、彼の長を取りて、我の短を補ふのみ。然るに近日の習練の道は、実を失ひ虚に流れ、我が朝の制度を顧みざる者有るに至る。是れ何の体ぞや。今より後、戎服の洋製に倣ふ者は、漫りに之を用ふるを禁ず。（慶応二年五月十日。『幕末御触書集成』三・四七〇頁所収三二二八）

真鍮銭及び文久小銅銭は自然の価に随ひて之を通用すべし。（慶応二年正月十日。同右書四・四二〇九）

仏蘭西国、遍く宇内の物品を其の都府に聚めて、以って展観場を開き、索め我が邦に及ぶ。官乃ち之に応ず。士民の之に応ぜんと欲する者も亦た許さる。（慶応二年四月五日、同右書五・五一〇八）

猿若街の三劇の、俳優の徒、近ろ旧制を犯す者多し矣。今より後、薗笠を戴かず道路を往来する者は、縛りて罰す

べし。（天保十三年七月四日・同右書五・四七五四か？）

奴婢を媒する者、近ろ法度を破り、私かに客を誘ひ処女若しくは寡婦と会合せしめ、一夜の歓を売り、以って活計を為す。一に娼女に同じきに、呼びて地獄と曰ふ。その罪重し矣。もし尚ほ法を犯す者有らば、宜く封事を以て官に訴ふべし。（慶応二年四月二十日、同右書五・四六八七）

鉄心の言う『新令記』とは、幕府が近頃発令した御触書を集めた物であり、それらから鉄心は選んで漢文に訳したのである。その原文は、右の括弧内に注記しておいたように、『幕末御触書集成』の各巻に収められているので、もう引く事はしない。ただ、第四番目の役者の編笠の御触書は、天保度のそれしか見当たらないのだが、もっと近い時、即ち慶応一・二年の物が別に存する可能性がある。また、第三番目のフランスの博覧会に関する条例には、土井聱牙の評があって、「鉄心先生も亦た、我が邦物品の最も奇なる者、姑く之を仏国に送りて異人に誇示せば、如何」と言う。

海鷗は、この日、遅く起き、迎え酒をやってから出発した。道を藤沢に取り、程ヶ谷からまた横浜に入り、子安子徳の官舎を経て、再び太田耕烟を訪ねた。

十八日、鉄心のもとには家信が届けられた。それには、今春は二麦が豊作で、一段の田から八、九俵を獲る者もおり、近年稀な事である、と言う。鉄心は、これを知って、旅愁が減じた。

一方、藤陰は、この日、勝安房守（海舟）に謁した。公は、歓待して、時事および外国事情を談じた。よく内実を穿っていて、聴くに値する。公は蘭学を修め、兼ねて銃技を善くする。嘗て命を奉じて海を渡り、唐山とメリケン（米国）に行かれた。去年、時事を建白して、容れられず、貶黜せられ、そこで閉居して外出しないそうだ。

海鷗は、李遂川・蔡伯良・労梅石たちと語りあい、午後二時に横浜港を立ち、速歩する事狗の如く、品川に達したの

は午後八時である。雷雨俄かに起り、真暗闇の街を稲光りを頼りに疾走し、十時に藩邸に帰った。

十九日（藤陰筆記）、鉄心殿の官舎に集って、海鷗・竹洲二子が携え帰ったところの清客寄贈詩文を一緒に見た。

それらは李遂川の五月十八日付の返筒と詩、潘脩儂・労梅石・蔡伯良の詩である。李遂川は、鉄心の注文に応じて聯額を書した事を告げ、諸子は鉄心が土産として布と茶を贈った事に感謝している。

二十二日、海鷗と同じ窓辺で『亦奇録』初編を校訂した。

二十三日、岩村藩士田辺益三が来訪するも、藤陰は不在なので、詩文稿を留めて去る。

二十五日（海鷗筆記）、竹洲は束脩を木下逸雲翁に行う。この日、筑前侯で菅公祠を祭ったが、香を上げる士女が参集して市を成した。

二十七日、新たに栽えた竹で気を得て亭々たる者は、その高さが簷（のき）に及んでいる。

新築の書斎の傍らに植えた竹について言っているのであろう。

二十八日、両国に遊ぶ。この夕は川開きである。ところが遊船は甚だ少い。都下のひっそりと寂しい事は慨嘆される。

六十一　大沼枕山の送別宴

二十九日、大沼枕山・鱸松塘が鉄心殿のために醼を忍ばずの池の氷月亭に設けた。鉄心殿は、鳥居圭陰・野村藤陰・雨石・沢野蠡海・菅竹洲および海鷗を連れて出かけた。着くと、筆硯が並べてあり、諸名家が既に到着している。天候と風景は大層良く、波がきらめき、魚や鳥が泳いでいる。蓮の花は開いてはいないが、その香りがずっと欄干にただよって来て、大層湖畔の趣がある。鉄心殿が言う。

「とりあえず飲む事にしよう」

そこで大杯を廻し、自分でも再三酌む。人人も争って飲み、談笑が湧き起る。一座は春のようになごやかで、詩を賦したり、画を描いたりする。暫くして夕日が簾に映ると、鉄心殿は俄かに一同に言う。

「拙者は門限あって、久しく留まる事ができぬ。どうかもっと杯を廻して歓を尽して下され」

妓女が杯をさし出す。鉄心殿は言う。

「小さい」

で、やや大きな杯を差し出す。また言う。

「小さい」

そこで、飯椀に酌んで、続けざまに何杯とも知れずに飲む。そして大酔し、馬に鞭打って去った。一同も夜になってから散会した。

この日集った者は、（木下）逸雲・（佐竹）永海・（藤堂）凌雲・（福島）柳圃・我古・（馬島）瑞園・蓬洲・（関）雪江・

（関本）三泉・雲堤・（佐谷）永湖・および妓女五名である。約束せずして来った者には、証庵・（塩田）順庵・（奥原）晴湖女史がおり、我々と併せると二十八人になる。約束していたが、至らなかった者には、（松岡）環翠・（小林）畏堂・（小橋）橘陰の三人がいる。約束して、かけ違った者には、（春木）南溟老人がいる。老人は間違って溜池に集まるものと思い、藩邸へ行ったのだそうだ。

括弧内の姓は私に補ったものであるが、集った者の殆どは、例によって画家である。枕山と松涛が会主であったが、この日の会の事は、『枕山詩鈔』三編下、丙寅（慶応二年）の所にも見えず、そのためか『下谷叢話』第三十五には記載されていない。この会は、鉄心たちが六月に大垣に帰るので、それを餞するために設けられた事が、鉄心に「五月二十九日、諸旧友と不忍池亭に飲別す。二首」（『亦奇録』中・付録）があるのに拠って知られる。その第二首は、次のようなものである。

風塵昨日変今日　風塵　昨日は　今日と変ず
話旧胸中百感横　旧を話せば　胸中に　百感横たふ
只合駆鯢成痛飲　只だまさに　鯢を駆って　痛飲を成すべし
倦鞍明日又西征　倦鞍　明日　又西征

時事は昨日と今日とでは大きく変っている。
昔の事を語りあうと、胸には万感が生じる。

ひたすら鯢を追いやるような勢いで痛飲すべきだ。

旅に疲れている身だが、明日からはまた遠く西に行かなければならないのだから。

何か「酔ひて沙場に臥す君笑ふこと莫かれ、古来征戦幾人か回る」（唐、王翰、涼州詞）を想い出させる詩で、鉄心があれほどに痛飲する心情が窺える作、と言ってよかろう。即ち、第一首の承句にも「征役天涯十歳過ぐ」という句があるが、鉄心は、江戸へのたびたびの往復や、京都、大坂への数次の出張に疲れている処があり、その憂さを払い遣ろうと大杯をあおる事になるのではなかろうか。

六月一日、智恩院法王が鉄心殿を三縁山（増上寺）に召見し、章杯および、和歌を賜った。その後、宴を真乗院に設け、海鷗たちも陪した。一酔した後、その庭園を歩いたが、幽邃にして趣きがある。夕暮れに辞去した。

二日、鉄心殿は西尾老公に謁した。海鷗は、諸友の家を廻って別れを告げた。

西尾老公とは、三河国西尾藩の前藩主松平乗全（やす）（七十三歳）であろう。

三日（竹洲筆記）、天笠屋に行き、雷火管（信管か？）十万を購入する。丁度、一種の新船来の品があり、色は純白で、大きさは豆のようだ。これを盤上に置いて火をつけると、急に蝮の形になる。その奇怪さには驚かされる。

海鷗曰く、この頃、連夜、米・酒・洋品を商う家を壊す者がいる。ひどいのになると、白昼に市中に横行する。しかし、何者がやらせているのか分らない。その奪った品物は、すべて飢渇している人々に施すので、飢渇している人々は

喜んで、やはり蟻や蜂のように集って来るのだそうだ。

五日（鉄心筆記）、公（戸田氏共）は老中棚倉侯（松平康英）に西の丸で拝謁した。大将軍の興隆と健勝を祝賀し、江戸出発の期日を知らせ申し上げたという。

六日、蓬仙川勝公に招かれる。私（鉄心）は、帰国の日時が近いので行かない。竹洲をして代りにその宴に陪せしめた。

竹洲曰く、公の好古の名は、都下に高い。その茶寮を蓬仙窟といい、甚だ佳麗である。書斎は、漢制を模して、その陳設してある物は、すべて古雅である。なかんづく絶品と称する物は、時大彬の瓷甌・張昆玉の茶壷・周芝巌の筆床である。この日、集まった者は、井上竹逸・川嶋清内・鵜飼玉川・鏑木雲洞兄弟である。

蓬仙とは、川勝広道であろうか。ならば、幕臣で、慶応元年には諸大夫、二年八月には外国奉行に進み、明治元年閏四月には開成所惣奉行に任じられた人物である。その伝は不明な事が多いが、好古癖で江戸に鳴っていたとは、あまり他に記載されていない事ではあるまいか。竹逸は画家で、渡辺崋山の門人、高島秋帆に砲術を学んだ。時に四十三歳。雲洞も画家で、雲潭の男である。

七日、丸山の長泉寺に行き、先考の墓を拝し、西帰の事を報告する。

鉄心の父忠行は、鉄心十六歳（天保三年、一八三二）の九月、江戸の地に客死した、というから、その縁で江戸の本郷丸山の長泉寺に埋められたのであろう（拙稿「小原鉄心の青年時代」五、江戸出府。『明治大学人文科学研究所紀要』

第六十冊）。

八日、一挺の奇銃を横浜から得た。西洋人スネルが言伝して言う、

「後日、もし西洋人と戦うことがあるならば、きっとこの銃を用いないで下さい。百発百中だから、こう言うのです」

九日、もろもろの同人が餞別に訪れた。（木下）逸雲は、天津酒一瓶と五味姜二包を贈った。そうして言う、

「これは私の知己である、唐山上海の李昌彦が贈って寄こしたものだ」

（春木）南溟は、古墨一筒を贈った。大層、佳い。会津の馬嶋瑞園も、書画数幅を携えて来った。拓本があるが、水戸の藤田東湖の詩である。たぶん文文山の「正気歌」に擬した作であろう。

と言って、東湖の「正気歌」の全文を鉄心は録しているのであるが、有名なもの故、省略する。

『亦奇録』中巻の記載は、以上で終り、「丁卯仲夏念」（慶応三年五月二十日）付の鷲津毅堂の評が付される。それも『下谷叢話』第三十六には見えないから、その訓読を挙げておこう。

此の篇、日に随って閲歴する所を録す。その体、范成大の驂鸞録・呉船録に倣ふ。而るに同行の諸子、交番に之を録すれば、則ち全くは襲踏せず。実に創格たり。余嘗て屋宇を営む者を観るに、衆工雑作す。既に成るに及び、其の功、都匠に帰し、棟に書して某建つと曰ふ。今此の篇、諸子の力を合せて之を成すと雖も、而も之を統ぶる者は、吾が鉄心に在り。余将に題して鉄心亦奇録と曰はんとす。

鉄心・藤陰・海鷗・竹洲という衆工の合作を、鉄心が編集長として取りまとめた、と言うのである。

六十二　「草書歌」

以上のように、『亦奇録』中巻は、慶応二年四月七日から六月九日までの記事を収めるのであるが、その付録には海鷗の「草書歌、泥翁公に奉呈す」が収録されている。という事は、「草書歌」は、その間に作られた作である、と考えられるという事である。『海鷗遺稿』では、この作は元治元年の処に配されているのであるが、それは修正される必要があろう。

この詩は、『海鷗遺稿』の内では比較的少い長編古詩であるし、鉄心の草書に対する海鷗の思いが表されている作でもあるし、彼の攘夷論も知られるのであるから、取りあげる必要がある。

俯仰宇宙間　宇宙の間を俯仰するに
誰也以書聞　誰ぞや　書を以って聞ゆる
小児米襄陽　小児は　米襄陽
大児王右軍　大児は　王右軍
揭来寥落千余年　揭来　寥落たり　千余年
吾邦泥公即其人　吾が邦の　泥公　即ち其の人
最工草書莫能敵　最も草書に工にして　能く敵するもの莫し
玄玄之訣酔中伝　玄玄の訣　酔中に伝ふ

江海為研山野紙　江海を研と為し　山野を紙とす
目没全牛膽如天　目は全牛を没し　胆は天の如し
一斗二斗飲不足　一斗　二斗　飲めども足らず
飲至三斗始破顔　飲みて三斗に至り　始めて破顔す
乃奮健筆大書書　乃ち健筆を奮ひて、書を大書すれば
観者吐舌愕且奔　観る者　舌を吐き　愕きて且つ奔る
雄於公孫舞剣器　公孫の剣器を舞はすより雄に
奇似蛟蛇鬪草間　蛟蛇の草間に鬪ふより奇なり
本知運用在心不在筆　本より知る　運用は心に在りて　筆に在らざるを
豪放敢讓張也顛　豪放　敢て張の顛なるに讓らんや
法至無法乃至法　法は無法に至りて　乃ち至法
元気淋漓泣鬼神　元気　淋漓として　鬼神を泣かしむ
君不見渾渾沌沌乱不乱　君見ずや　渾渾　沌沌　乱不乱
於書於兵其妙然　書に於て　兵に於て　其れ妙然たり
若遣泥公防醜虜　若し泥公をして醜虜を防がしめば
不使一兵入港関　一兵をして港関に入れしめざらん

この宇宙の間を眺めわたすに、

誰こそが書法によって聞えていようか。
弟としては宋の米芾、
兄としては晋の王羲之だ。
爾来、千年あまり寂しい状態であったが、
我が日の本の泥公こそ、ほかならぬその一人だ。
なかんづく草書に巧みで、匹敵する者は無く、
秘中の秘たる奥儀を酔っているさ中に教えて下さる。
その規模の大きさは、江海を硯とし、山野を紙として、
余裕のあることは、かの庖丁が一頭の牛を眼中に置かなかった（『荘子』養生主）ごとくであり、胆の大きさは天のようだ。
一斗や二斗の酒は、飲んでも酔わず、
三斗まで飲むと、やっと破顔一笑する。
その時、雄健な筆使いで、書を大きく書くと、
観ている者は舌を吐いて驚き、そして退散する。
その形は、唐の舞妓公孫大娘（杜甫「観二公孫大娘弟子舞二剣器一行」）が剣を舞わすよりも雄壮で、
みずちや蛇が草の間で戦う様よりも奇抜だ。
元より筆の運用は心に基くものであって、小手先の技術ではないということを御存知で、
その豪快な筆使いは、どうして唐の草聖張旭の顕なる書法（杜甫「飲中八仙歌」）に劣ろうや。

技法の極致は無法である事を体現され、
その精気があふれた筆勢は鬼神をも泣かせる。
あなたは見ないか、その万物をまじえて、乱れているような、乱れていないような形は、
書法においても兵法においても素晴らしいものである事を。
もしも、この泥公に夷狄を防ぐ事をまかせるならば、
一人の兵をも港に入れさせない事であろう。

私は当初、この泥公とは、草書をもって鳴る高橋泥舟か、と考えたが、海鷗が泥舟を見知っていたとは思えない。そこで、実在している人物の号ではなくて、知る人ぞ知る、鉄心の周囲に在る人が読めば、すぐに鉄心のことを暗に指している架空の号だな、と気づく底の、いわば偽号であろう、と考えた。と言うのは、その当時、海鷗や鉄心の周囲に泥翁を号する人物は見当たらず、また、草書に巧みで大酒家であり、しかも攘夷論者である、という泥翁の属性が、鉄心のそれと一致しているからである。海鷗としては、大層人気がある鉄心の草書を賞讃したいのであるが、詩題に鉄心の号を出すと、鉄心に露骨にへつらっているかのように解されるので、それらを避けるために偽号を用いたのであろう、と考えられる。だから、この詩を鉄心が読むと、誰よりも先に泥翁とは暗に自分の事を言っているのだな、と思い当る筈であり、さればこそ、『海鷗遺稿』の頭評には、

小原鉄心曰く、鉄心、之を読みて面熱す。

とあるのである。これは、鉄心が自分の事だと思い当って、嬉しさと面はゆさとが交錯する余り顔を紅潮させた事を、自ら述べた発言であろう。言い換えれば、海鷗は、このように間接話法を用いて、しかも情熱と才気にあふれた力作に

よって鉄心の草書を称えたのであり、鉄心も親子ほど年が離れている海鷗から遠まわしに称えられると、内心の愉悦が押さえられず、海鷗が可愛くてたまらぬようになるのであろう。このように海鷗の如在なさがよく発揮された例ではあるが、しかし海鷗としても、心底にそのように高く鉄心の草書と人となりを認めている所があるからこそ、このように詠ずるのであって、その事は鉄心も周囲の者も理解していたのではなかろうか。江馬金粟が、

　蜻洲（日本）剖剸してより以来、此の人無く、此の筆無し。

と評するのは、同様に鉄心を稀代の人物と暗に持ち上げているのであり、政治面においても、芸術面においても、資力面においても大きな存在であった鉄心を、大垣の詩人たちは「北辰の、其の所に居て、衆星の之れに共ふが如」（『論語』為政）く取りまいていたので、このような詩が生まれてくるのであろう。

六十三　海鷗の榛名・妙義旅行

『亦奇録』下巻の冒頭には、例によって鉄心の序に当る文章が置かれている。それは、

　我が公戸田氏共は、幕命を奉じて、急いで京都に赴く事になり、六月十日に江戸を出発なさる。野村藤陰は、これに扈従する。私（鉄心）は一駅遅らして出発する。そこで、菱田海鷗と菅竹洲の松嶋に遊ぼうという計画は、沮まれたので、二人もともに西帰しようと思うのだが、山水に遊ぼうという念が絶ち難いので、海鷗は筑間生を連れて先に出発し、榛名・妙義山の「奇」を探る事になった。菅竹洲は、独り甲斐に入って、富士山の「奇」を尋ね、その名勝を記す事にした。鉄心と藤陰は、東海道を行くので、もはや山川を記す事もない。そこで、鉄心は本朝の史から選び、藤陰は漢土の事を拾って、十日間、それぞれ十篇の持論を吐いて、日録の間に挿入する事にした。既に

やり尽された事ではあるが、馬上で史を論ずるのは、やはり「奇」とせざるを得ないであろう。そこで、以上の三奇を合せて下巻を作る事とし、またまた亦奇録と名づけるのである。

というものであり、これまでの『亦奇録』の仲間が三方面に分れて行動する故、三方面から日録を記載する事情を述べている。戸田氏共が京都に急行するのは、六月五日に第二次長州戦争の戦闘が開始され、やがて大垣藩は周防大島や、安芸大野村で長州兵と戦う事を幕府から命ぜられるのであるが、その準備のためであろう。

海鷗が鉄心・藤陰に先立って出発した事は既に知られたのであるが、それは六月四日の事であった。そこでまず、海鷗たちの行動から見てゆこう。

四日（海鷗筆記）、雨、筑間生を連れて江戸を出発し、上尾駅に宿る。当初私が郷里を出た際には、松嶋に遊ぶと称して、実は函館に行き、そこからヨーロッパに航海しようと思っていた。事情があって果せず、そこで帰路を中山道に取り、榛名・妙義山の奇を探る事にした。だが、国内の旅行で、どうして海外雄飛の大望を償うことができようか。この夜は、そのためにがっかりしていた。

この夜、上尾の宿で、海鷗は、「客舎」という七絶を作っている。

孤負鵬程万里遊　孤負す　鵬程　万里の遊に
一灯風雨気如秋　一灯の風雨　気秋の如し
誰知今夜帰人夢　誰か知らん　今夜　帰人の夢
不到家山到歐洲　家山に到らず　歐洲に到るを

鵬に乗って万里のかなたに翔けめぐろうという希望は裏切られた。
灯のもと、風雨の音を聞いていると、空気は秋のように冷たい。
思いもしなかった、今夜、郷里に帰る私が、
郷里の夢を見ないで、ヨーロッパの夢ばかり見ていようとは。

海鷗の欧洲行きの熱意が生半可なものでなかった事を表わしているのである。海鷗が安政元年の吉田松陰のアメリカ密航計画に刺戟されていたのか否か、定かではないが、このような海鷗の希望を知ってみると、思い当る事がある。それは、『海鷗遺稿』の慶応元年初頭に相当するあたり（第八丁表）に「舟行」と題する五律があるが、その「将に図南の計を決め、直ちに海を横ぎる鱈に乗らんとす」という尾聯は、このヨーロッパ渡航計画を言っているのかも知れない、という事である。と言うよりも寧ろ、ヨーロッパ行を含意させて、この『荘子』逍遥遊篇に出ずる語（図南）を用いているのだ、と解釈すると、ぴったりと落ちつくのである。

五日、雨、時々晴れ。鴻巣の茶店で休む。郷里の人に出会う。言う、
「岩鼻川が溢れて、私は五日間、川留めを食い、昨日、やっと渡しが開いたのです。あなたは折を得て幸運です」
そこで、軽く飲んで別れた。午後四時頃、深谷駅の宿に入った。
六日、高崎に到って宿す。この夕、初めて快晴、月と星が輝いている。
七日、暁発。迂行すること六里、榛名山に登る。老杉が道を夾み、四もに人声無く、頗る霊である。杉が尽きると、十数軒の萱ぶきの家が現われたが、神官の家であろう。鳥居を潜り、朱欄橋を渡ると、両崖はすべて石で、層をなして

立ち、奇怪な形をなしている物が少なからずある。その下は奔流が怒号し、音は大風雨のようだ。そして楓や松が石の隙間から倒生ないしは横生し、緑の葉が白い水に映って、まことに素晴らしい眺めだ。私は少年の時、箕面山に遊んだが、その様子はここと大よそ似ていた。だが、箕面山は幽邃で名高く、こちらは奇をもって勝っている。

さらに次第に進むと、巨巌が屏風のように立ち、人はその側面に蝸（かたつむり）のようにくっついて通過する。石坂を登ると、古い社があり、大層古めかしい。石坂を下って左折し、半里あまり行くと、天神嶺に到る。湖があり、峯々がこれを環っていて、小富士・烏帽子岳・冠岳というが、どれも皆平凡である。私は、あまり評価はしない。忽ち雲が起り雨が降り出したので、疾走して金剛院に宿を取った。住僧は私と同郷の人で、ねんごろにもてなして御馳走を勧める。ちょうど盛暑の候であるのに、夜は寒くて火を起す。山中の天候が異なることが推して知れよう。

八日、山を下る。道は二つあり、公道は廻り道で、私道は早道である。で、早道を選んだ。谷川沿いの道で、険しく狭く、泥道で大層行き悩んだ。やっと松井田駅に出、また側道に入る。臼井川を渡り、たそがれ時、妙義駅に到着した。この日、道を誤り、二里余り廻り道した。私は筑間生に、

「書生が事を誤るのは、ただに道ばかりではない」

と言って、一緒に大笑いした。

九日、早く起きて、案内人を雇ってから出発した。先に妙義神社に参詣し、それから金洞山に登った。石門の鬼窟を究めてから、巌高寺に宿泊する。寺は中岳に在る。仰いで大日峯を視ると、何十丈あるか分らない。そして、天狗・釈迦・鬼面の諸岳が前をとりまいている。ここまで足を伸ばすと、ほとんどこの世ならぬ思いがする。夜、大日峯に登って月を見た。

六十四　鉄心の江戸出発

十日、寺を辞して下り、麓に到ると好く晴れて、暑い風が炎のような空気を扇る。村路を取って、横川に出、関所を過ぎ、碓水嶺を踰えて、晩に追分駅に宿泊する。

鉄心の方は、侯が上屋敷を出発したので、暫くしてから騎馬でたち、品川に到り、海辺の二階で飲み、夕方、金川駅に投宿した。宮翠迂・田雨石が、ここまで送って来た。太田耕烟が名和・北村の両人を連れて、横浜から来、清人鉄鳳鳴の墨牡丹一幅を贈った。頗る逸品である。ともに夜半まで痛飲して、別れた。

鉄心の史論は、「兵を用ふるの妙は、勢を制するに在るのみ矣」という認識のもとに、日本武尊の東征と神功皇后の西討とが勢に因って成果を挙げた、と論じたものである。

藤陰は、鶏鳴に起き、衣裳を整えて待っている。やがて供回りも揃い、氏共公は駿馬に鞭って出発される。行列はおごそかに川崎駅に到る。突如、数名の夷人が馬車に乗ってやって来たが、こちらの行列を見て、道ばたに避けた。夷人がどうして礼を知らない事があろうか。

夕暮、戸塚駅に投宿した。今度の旅では、鉄心殿は独り後方に在って、馬上に国史を論じて、旅の憂さを晴らす事になっている。私もまた顰に倣って、漢土の歴代の事蹟を論じて、行間に挿ませて戴こう。

その藤陰の史論は、漢の高祖や項羽を引合いに出して、徳に従う者は栄え、徳に背く者は亡ぶ、と論じたものである。

また、藤陰が夷人の礼について記している事は、三年前の文久二年八月に起った生麦事件を意識しての事であろう。夷人の全てが礼儀知らずだ、という事はないと認識したのである。

十一日、（海鷗）、大霧の中を、追分駅を出発し、誤って右に曲って数里を行くも、それが北陸道である事に気がつかなかった。後でその土地の人に問うて、これを悔む。土地の人は言う。

「やや遠いけれども、善光寺に詣でると良いですよ」

海鷗、「山水は宜しいでしょうか」

「そうでもありません」

そこで、案内者に金を出して、道を田間に取り、塩灘（しおなだ）駅に出、夕刻、和田駅に投宿した。

宿の主人は大層文墨を好んで、酒間、紙扇を出して、海鷗に揮毫を乞う。この夜、月が非常に明るく、谷川の音が涼しく感じられた。

海鷗はこの日、「大霧に感有り」という七絶を詠じているが、それは、「寸前復た鬚眉を辨ぜざ」る大霧に対して、「想う他の快戦の川中嶋、団扇もて刀を支ふるは即ち此の時」と、大霧を利用して突如討って出た上杉謙信の大刀を武田信玄が軍配で受ける、という故事を踏まえた作であった。この時の海鷗の脳裏には、頼山陽の有名な「不識庵、機山を撃つの図に題す」があったかも知れぬ。

鉄心はこの日、二日酔いの状態で出発した。明け方の空気は涼しくて、甚だ快適である。正午近く、藤沢駅で昼食を

取り、大磯駅の沖遠亭に宿泊した。海を前にして晩酌する。

この日の史論は、近ごろ大坂で高津宮に上って一望し、仁徳天皇の「高きやに」の歌を想い出して感ずる所あり、という体験談から始まる。そして、仁徳期は豪富であったが、当代のそれに及ぶものではない、当代の豪富は、むしろ奢と言うべきである、物価の高い事は天地を倒置したよりも甚しい、と物価論に及ぶ。そして結末は、「嗚呼、倒置する者は、豈惟に物価のみならんや」と、謎めかした文章で終るのであるが、それが、天皇と幕府の力関係に就いて言っているのか、それとも、薩長の武力が幕府軍のそれを圧倒しがちな状態を歎いて言っているのかは、俄かには明らかにできない。

藤陰は、早朝に出発して藤沢駅に到った。思いがけなく数個の網代駕籠が土煙を上げて走って来る。たぶん西国（長州）の急報を江戸に伝達するのであろう。梅沢にさしかかると、「この土地の米価は、他国と較べると、三分の一安い。小田原侯の領内は、いずれもそうである」と言う者がいる。侯が民に情けをかけている事が知られる。小田原駅に投宿した。

藤陰の史論は、漢の武帝が諸藩をたびたび征討した事を取り上げて、兵禍の惨を説き、人君の誤ちは天下を掩うことになる事を論じたものである。

十二日、海鷗は、和田峠に登った。珍しい花が取り取りに咲いており、時おり遅い鶯の鳴き声も聞える。樋橋（といばし）村を通

ると、元治元年冬、水戸の天狗党の浪士が西上した際にここで戦った、という。これを聞いて、久しく慷慨した。下諏訪を通って、諏訪湖の景色を鑑賞し、桔梗が原に到ると、月はもはや天心に在る。本山駅に宿泊して、大坂以西の急な戦闘の知らせを聞いた。夜半に大雷雨あり、簷から滝のように雨が落ちる。

六十五　海鷗と天狗党

元治元年十一月二十日、武田耕雲斎が率いる水戸の天狗党は、和田峠を通過しようとして、これを遮る松本・高島（諏訪）の二藩の兵と砲火を交え、激戦の末、二藩の兵を退散させた。天狗党の戦死者は六人、負傷者は三人、敵の戦死者は十一人、捕虜は八人であった。海鷗が通った時には既に建てられていたか否かは不明であるが、水戸の綿引東海が「元治甲子水戸浪士殉難之処」と書した石標と戦死者の墓碑とが樋橋村の西に建てられた、という（『水戸幕末風雲録』五七一頁）程の由緒ある地である。前述したように、天狗党に同情していた海鷗は、この事を知って、彼らの艱難と誠心を思いやり、悲哀を催したのであろう、「和田嶺」と題する五律を詠じた。

孤松摩白日　孤松　白日を摩し
絶頂逼蒼穹　絶頂　蒼穹に逼る
万里渓流外　万里　渓流の外
八州烟靄中　八州　烟靄の中
花残疑夏浅　花残りて　夏浅きかと疑ひ

馬瘠覚民窮　馬瘠せて　民の窮するを覚ゆ
経過干戈処　経過す　干戈の処
慨然涙満衷　慨然として　涙衷に満つ

一本の松が輝く日に接するほどに聳え、
峠の頂は青空に迫るように高い。
谷川を越えて、江戸から遥か離れ、
関八州がもやを通して眺められる。
遅咲きの花が咲いているので、夏がまだ浅いのかと思ってしまい、
馬が瘠せているので、土地の人の貧しさが思いやられる。
天狗党が干戈を交えた場所を通ると、
歎かわしくて、涙が胸中に満ちるほどだ。

この詩に就いて、南摩羽峰は「詩史」と評する。旧戦場の地理的状況をよく伝えている、という意であろう。小野湖山は、「第六句、古人に愧じず」と言う。杜甫の如くに人民を懐う志を備えている、と讃えたのである。

鉄心の方は、明け方、大磯を立った。海から輝く太陽が上り、大海原が馬の蹄の下にひろがる。どちらの方角が「共和州」なのであろうか。小田原を通過すると、まさに炎熱である。箱根の関所を越えて宿泊する。夜は涼しくて、蚊がいない。

この日の史論は、仏教移入論である。当初、我が国に仏教が入るや、物部守屋の移入反対論と、蘇我馬子の賛成論とが対立した。今からこれを観れば、守屋が賢、馬子が佞である事、は明らかで、誰しもが守屋の方を選ぶであろう。とはいうものの、千百年の後、佞者の好んだ仏教がいよいよ盛んで、賢者の意見は終に行われないのは、天つ神も人慾には勝てないからであろうか。私は先に横浜で李星から、貴国は儒教と並んで、仏教を尊ぶかと問われたが、「水到れば渠成る」と答えた事だった。

藤陰は、この日、明け方から箱根を登った。道には石がごろごろして、乗り物の人も馬の者もともになやむ。関所を通過してから休んだ。氏共公は侍医に命じて、家臣たちに湯薬を賜わる。前もって暑気あたりを防ごうと考えられての事であろう。阪を数町下ると、公は乗物からおりて歩き出された。年は十三歳にしか過ぎないが、脚は大層達者で、従者たちが皆汗を流して走る。西を見やると、富士が雪をかぶっており、元気が急によみがえる。午後四時頃、三島駅に投宿した。

藤陰の史論は、漢の龔遂が渤海の盗賊を治める術を問われて、「乱民を治むるは、乱縄を治むるが如し。急ぐべからず」と言って、飢寒に迫られた小民が乱を為した事を憐んで、その反省を待つ態度に出でた事を論ずる。

六十六　菅竹洲の富士下山

十三日、海鷗たちは、贄川（にえかわ）駅に到る。川や山の形がどれも凡ではない事が急に感ぜられる。福島の関を通過して、上

松駅に宿泊する。

この贄川から上松に到る間に、海鷗は七首の詩を録しているが、その第三首の「鬼淵台にて鉄心大夫を懐ふ有り」は、寝覚の床の岩上での作か、と考えられる。第十一節で触れたように、「十数年前、大夫に陪して、月を此に看る」という題注が付せられている。十年とは概数で、慶応二年から足かけ九年前の安政五年二・三月の交、海鷗が遊学のため江戸に赴いた際に、鉄心も同行していて、その折にこの辺りで一緒に月を見ることがあったのであろう、と考えられる。詩は次のようなものである。

酹石一杯酒　石に酹す　一杯の酒
臨風憶旧遊　風に臨んで　旧遊を懐ふ
金鞍海南駅　金鞍　海南の駅
今日定何州　今日　定めて何れの州ぞ

石に一杯の酒を注ぎかけ、
風に吹かれて、十年前に一緒に月見をした事を思い出す。
立派な鞍に跨って東海道を旅しておられる鉄心殿は、
今日はいったい何れの土地におわす事か。

しかし海鷗は、このように鉄心を思いやって感傷に耽っているばかりではない。二日間に多作した詩の中には、「洛下風塵漲る、山中歳月閑なり」（「偶述、筑間生に示す」）、「身病みて官情微なり、時危くして故国に帰る」（「馬籠駅に到る」）というように、第二次長州戦争の勃発に思いをやって身心を緊張させる、という句をも示しているのである。

鉄心は、箱根山を下って、三島駅に到ると、富士山から下って来た菅竹洲に出会った。一酌して西へ進み、吉原駅に投宿した。この日、浜では大漁で、鮪魚（まぐろ）が千頭余りも獲れたという。

この日の鉄心の史論は、和気清麻呂論である。赫赫たる皇統が、道鏡の覬覦によって墜ちんとした時、これを防いだのが和気清麻呂の直言であって、古今無二の節義である、とするのが普通の世論である。が、鉄心に言わせれば、清麻呂が直言をもって朝廷に復命したものは宇佐八幡の神託なのであって、清麻呂の言ではない、清麻呂は単に邪に党しなかっただけであって、その事はそれほど難事ではない。それよりも、満朝の百大臣が一清麻呂のように行動することを知らなかったのを罵るべきである。という論であって、世論に従わないで、清麻呂への評価を少しく貶めようとするものである。こうした変った論を立てる鉄心の真意が那辺に在るのか、俄かには明かにできないが、百大臣を罵る鉄心には南摩雨峯が評するように、何者へか「激する所」があるのかも知れない。

藤陰は、この日、吉原にさしかかって、菅竹洲を宿舎に尋ねたが、会えなかった。竹洲が、本日、富士山を下って、この地に出て来る、という約束をしていたからであるが、まだ到着していない。由井駅に投宿した。

藤陰の史論は、後漢の光武帝が三千の兵をもって尋邑の百万を破り、旬月を出でずして天下を定めた例を引いて、英雄の策が一たび定まるや、兵の多寡を計らず、立ちどころに功業の成る事を論じたものである。

十四日、鉄心は、早朝に飲んで酔を取り、馬に跨って出発する。空が明けると、雪を戴く富士山が空中に立ちはだかっている。そこで、竹洲の独遊は素晴しかったろうと思う。倉沢で休む。佳蘇魚が店に入ったばかりで、新鮮な味はこの上ない。筋は、アワビの蒸焼をも問題としない。興津駅に到って、久留米藩士吉村武兵衛に逢い、西国（長州であろう）の近況を語りあい、再会を約束して別れた。府中に宿泊する。

鉄心の史論は、平清盛・重盛父子をめぐる論である。清盛は英傑の器ではないが、武臣として未曾有の地位を得たのは、重盛のお陰である。即ち、平治の乱で、一挙に賊を滅したのは、途中、京都の騒ぎを聞いて、清盛が躊躇している間に、重盛が進撃を決したからである、という論である。

藤陰は、この日、興津川に到ると、駅の長が橋を架して行列を渡した。午後四時、岡部駅に投宿する。

藤陰の史論は、魏武こと曹操に就いての物。

曹操は魏主となってから、更に帝位を窺っていたが、さすがに名義を畏れて、みずから抑えた。曹操が亡くなって後、曹丕が帝となったのだが、そのように自身が簒奪できなかったのは、この名義を憚っての事である。

十五日、海鷗は、落合・中津川・大井の数駅を経て、（追分から）左折して名古屋道に入った。午後二時頃、迅雷が鳴ったが、間もなく晴れた。夜、高山（春日井市高山町）に宿る。盛暑にして、初めて蚊の声を聞いた。

この日海鷗は、「鉄心大夫に寄懐し奉る」を作っている。

載筆行装各上途　筆を行装に載せて　各の途に上る
想君文気圧三蘇　想ふ君が　文気　三蘇を圧するを
盲風快雨天竜上　盲風　快雨　天竜の上（ほとり）
把酒興窓策廟謨　酒を興窓に把りて　廟謨を策せん

旅支度に筆を加えて、別々に出発致しました。
貴殿の詩文の才は、かの蘇洵・蘇軾・蘇轍父子を圧倒している、と思います。
目もあけられない強風と篠突く雨の中、貴殿は天竜川の辺におられて、
乗物で酒を飲みながら、藩の政策を練っていらっしゃる事でしょう。

その鉄心は、この日の暁、府中を出発し、暮に掛川に投宿した（まだ、天竜川に到っていない）。一日の内に宇津山・日坂という二つの嶺を越え、阿部川・瀬戸川・大堰川という三つの河を渡った。夜半、急檄が西国から到った。目がさえて眠れない。

鉄心の史論は、源頼朝論である。当初、鉄心は、頼朝を未曾有の功と、未曾有の罪とを有する者、と考えていた。が、再思すると、その功は、乃祖源義家の前九年・後三年の苦戦によって啓かれたのであり、頼朝はそれに乗じて王権を奪って天下を馭したのである。王室が道を失って、みずから頼朝に路を啓いた、とも言える。頼朝の父源義朝は、一方では、保元の乱において臣子が君父を弑するという惨毒を行っている。その余殃があるのは、疑うまでもあるまい。

鉄心は、頼朝の「余殃」を明言してはいないのであるが、南摩羽峯は頭評で、頼朝の子孫が僅か二代にして北条氏に制御された事を「余殃」と言うべきだ、と補っているのである。

藤陰は、曇天のもと、大堰川に到った。川越えの人夫数百人がかしましく客を渡している。手をつないだり、肩にまたがらせたり、板輿に載せたりしている。氏共公の乗物は、数十人が囲み、護って渡し、近従は皆裸で従う。小夜の中山に到ると、雨が急に降り出し、暑熱が洗われて、秋のようにひんやりとなった。夜、袋井駅に投宿すると、雨はますます激しく、軒から雨滴が滝のように流れ、一晩中、音がした。

藤陰の史論は、唐に材を取っての刑賞論である。刑賞は天下の刑賞であって、一人の君主のための物ではない（法の下の平等）。唐の太宗は、重用せる封徳彝を斥ける事によって、天下の義を明らかにし、自分をたびたび苦諫した魏徴を重用する事によって、平日の讐を忘れた。裴寂は、賄賂を行った者は、故旧と雖も貶斥した。蕭瑀は、李靖の過ちを弾劾したけれども、その功を録して、これを賞した。刑罰と賞誉がこのように公正に行われるならば、臣下はいずれも勉励して、その職にはげむであろう。後世の君主は、自分一人の喜怒によって賞罰を加えるので、大才がついに他に帰してしまうのだ。

六十七　海鷗の名古屋入り

十六日、海鷗は、多治見を通過するが、このあたりは陶窯を業とする者が多い（海鷗の祖父もそうであった）。坂下

で昼食を取り、午後四時頃、名古屋城下に到着する。桃壺禅師を客寓に訪れ、そのまま宿泊した。月光が大層清らかである。

この日、海鷗は、「途上」「桃壺禅師と月に対す」の二首の詩を作っている。「途上」は次のような作である。

帰人心日緩　帰人　心日に緩やかなり
郵逕問奇行　郵逕　寄を問ふて行く
陶戸窯烟直　陶戸　窯烟直なり
僧園鶴影明　僧園　鶴影明るし
天低連碧海　天低くして　碧海に連り
野曠帯金城　野曠くして　金城を帯ぶ
応有一樽酒　応に　一樽の酒の
佳朋待我傾　佳朋　我を待ちて傾くるもの有るべし

故郷に帰る自分は、日に日にゆったりした思いになり、
村々の道を珍しい景を探しながら進む。
陶工の窯からは煙が真直に立ちのぼり、
寺の庭では鶴が影をくっきりと映して立たずむ。
空は低く垂れて碧海の方まで続き、

広い野のかなたには名古屋城が見えている。
あそこにはきっと酒を存分に酌みかわそうと、
私を待っている友人がいる事だろう。

その「佳朋」とは、次の詩に見える桃壺禅師、また十七日の記事に見える森春涛・鷲津毅堂らを謂うのであろう。桃壺禅師とは、三月二十九日に三河の吉田駅にて袂を分ったのであるが、今宵また名古屋城に上る月を眺めながら、江戸の話をしたり故郷の話をしたりしたのであった。

鉄心は、この日、夜明け、大雨の中を出発したが、天竜川が俄かに漲り、荒井の渡しに到ると、浪が風にあおられて危険な状態であるために、晩に白須賀駅に投宿した。氏共公らの駕も、ここに止っており、鉄心は拝謁して事を奏した。その後、公は酒を賜った。この日は、十四里以上進んだ。

鉄心の史論は、北条氏論である。北条氏が其の主（源頼家）を弑し、源家の権を盗んだのに、大業を成就できたのは、姦謀に巧みだからである。巧みに人を害して私利を図る者は、他人をそそのかし、他人の手を借りて、おのれの欲を逞くする。これを先制の術と謂うが、北条氏の国を立つる術も、これに似ている。だが、北条氏が九世、百五十余年の久しきを維持できたのは、泰時や、時頼の政治が孤窮を憐み、寃枉を察して、民心を得たからである。ただし、北条氏には、このような美事が多々あるけれど、陪臣にして至尊（承久の乱における後鳥羽上皇や、順徳上皇）を絶海の島（隠岐や佐渡島）に幽閉したのは掩うべからざる罪である。

藤陰は、この日、猛雨の中を天竜川に到った。水がみなぎっていて、渡れそうもない。吉田侯が二階船を用意して、氏共公を渡して下さった。家臣も別に舟を用意して渡した。

雨が次第にやんできたので、荒井の渡しを渡る。波が大層あらく、舟を遣るのが大変だ。晩になって白須賀駅に投宿した。昨夜、急使があって、西国の警を報じた。公はそこで鉄臣殿を召して、国事を相談されたそうだ。

藤陰の史論は、唐の徳宗が奉天に在った時、陸贄が帝に己れを罪して天下に謝する事を勧め、帝がそうしたところ、叛将悍卒がまた自らの罪を謝した事を取りあげ、徳宗が終始、陸贄の諫言を用いておれば、貞観の治が復興できたろう、と論じたものである。

十七日、海鷗は、森春涛と平野泥江の二友を訪い、また鷲津毅堂を尋ねた。毅堂は海鷗を留めて酒を出し、東西の事を談じ、海鷗は夜深けになってようやく桃壺禅師の寓居に帰った。毅堂が八日に高二百俵に、御足高若干を給せられるようになった事を、永井荷風は『下谷叢話』第三十五に伝えているが、この海鷗の訪問の事は脱落している。

鉄心は、この日、氏共公の駕の後方に付いて出発し、吉田に到ると、横山舒公（小野湖山）と飲み、岡崎に宿泊した。藩士佐野多門介が海鮮を贈ったので、晩酌した。時に大垣から便りが届き、江馬金粟が自著『守国論』を寄せて来た。鉄心は「守国」の二字を見て、まず心に喜び、手に取って読んでみると、治民・養士・積財の三項を挙げて論を立てている。そこで手を拍って、

「我が意を得た」

と言った。

鉄心の史論は、楠氏論である。楠氏一門の誠忠は日月と光を争うものだが、楠正儀が賊に降った事だけは、甚しく異っている。頼山陽は、正儀の心中を見抜いているように、その降伏は南朝を存続させるためでろう、と論じた（『日本外史』五・楠氏）。だが、正儀のような行為は、「義なる者は為さざるなり」。また、正成は湊川において、なおも生きのびられる術があったのに、国に殉じて死んだが、どうして正行に遺言して事を自身実行しなかったのか、有道の者に尋ねたい。

鉄心の論に、定論になっている山陽の史論に敢えて文句を付けるような傾向がある事は、前述したが、この場合もそれであって、山陽が弁護している正儀や、完全無欠としている正成に対して、強いて粗（あら）を探してみた、という論である。

藤陰は、この日、非番であって、晴天でもあるので、鉄心に従って小野湖山および辻村泰介を吉田に訪うた。二人は喜んで迎え、旗亭に導いて歓飲刻を移してから去った。暮に岡崎駅に投宿したが、泰介だけはここまで送ってきた。

藤陰の史論は、五代周の世宗論である。五代の君で論ずるに足る者は、世宗だけだ。嘗て侍臣に、「兵は精を務めて多を務めず、百人の農夫も一人の戦士を養う事ができぬ。どうして民の膏血をしぼって、この無用の物（兵）を養えようや」と言ったが、これはよく用兵の要を知った言である。だから、南征北伐、向う所必ず勝ったのである。そして、戦争の合間には、儒者をして大義を検討せしめた。また、刑賞は喜怒にまかせなかった。叔季の世に、これに及ぶ君主はいない。しかるに、大功成らずして、中途で早逝したのは惜まれる。

六十八　海鷗・鉄心らの再会

十八日、晴、海鷗は、午後、桃壺禅師と宮駅におもむいた。槍や戟に赤い布切れを着けた兵隊が身軽な感じでやって来る。我が大垣藩士である。旅館で休んで、鉄心殿を待っていると、やがて菅竹洲が破れた服にぼうぼうと乱れた髪で、手に鷺鳥をさげて、やって来た。海鷗は、「無事だったか」と問う前に、すぐに「富岳は素晴らしかったか」と聞き返す。互いにその性急さを笑っていると、駅丁がたちまち鉄心の到着を告げた。すぐに小躍りして出迎え、また城州楼に上ると、御馳走が並べられている。やがて武士や儒者たちが続々として拝謁に来、杯を飛ばして快談し、豪興大いに発する仕儀と相なった。夜の十時頃になると、大勢が酔いつぶれてしまう。鉄心殿は更に舟を命じて、月を海上に眺め、夜半になって帰った。

海鷗は、この宴の模様を、「酔後、七律を賦す、一首」に詠じている。

雪虀紅膾酒如油　雪虀（せい）　紅膾　酒は油の如し
粉陣香囲十二楼　粉陣　香囲　十二楼
昨日都門成快別　昨日　都門に　快別を成し
今宵海駅又豪遊　今宵　海駅に　又た豪遊す
名流健筆飛氷雹　名流の健筆は　氷雹を飛ばし
猛将雄談墜斗牛　猛将の雄談は　斗牛を墜（おと）す

酔喚画船棹明月　酔ひて画船を喚び　明月に棹させば
満天風露水悠悠　満天の風露　水悠々たり

雪のように白い蘿（あえもの）、紅いの刺身が並べられ、酒は油のように濃密だ。
高殿で我々は、白粉を塗り、芳香を放つ美女に取り囲まれている。
江戸で鉄心殿と快く別れたのは、つい昨日のようだが、
今夜は海浜の宿場で再び一緒に豪遊しておる。
名のある儒者は、氷や雹のように清らかな墨を飛ばして、盛んに揮毫し、
勇猛な武将は、北斗星や牽牛星を落すような勢いで雄弁を振う。
酔後、美しい船を用意させて、明月のもとに漕ぎ出すと、
空には涼風が吹き渡り、露がおりて、水面は果しなく広がっている。

鉄心は、この日、宮駅に到着しようとしていると、海鷗が出迎えた。海鷗は、木曽街道から来って、ここで落ちあったのである。そのまま、そこで泊り、夜は桃壺禅師・平野泥江などと船を海に浮べて、月を眺めた。遊船には灯がかかげられ、絃歌は耳を聾するばかりで、そのために俗気から逃れられず、ただ痛飲して豪興を尽すばかりである。真夜中に帰って寝た。

鉄心の史論は、足利氏論である。古来、武家が幕府を開いたのは関東においてであったが、足利氏だけは京都におっ

て、子弟を関東に置いて鎮撫させていた。当時は、問題が近畿に存していて、関東には無かったからであろう。尊氏の時には、それが成功したが、義満になると失敗が甚しかった。それでも十三世の久しきを保てたのは、細川頼之の輔翼匡済があったからである。後、応仁・文明の間には、朝廷衰退し、幕威も地に墜ち、虎狼の臣が争闘するようになったが、いったい誰がそうさせたのか。林道春は、応仁の戦の際には、天下はただ細川・山名あるを知って、将軍のあるのを知らず、と言ったが、私は更に、当時の武臣は天子ある事を知らざる者のようであった、と言いたい。

藤陰は、この日、暁に出発して、池鯉鮒（愛知県知立市）に休憩し、宮駅に到って宿泊した。その夜は、彼は宿直で、氏共公の本陣におり、鉄心の盛宴に参加する事ができず、遺憾に思っていた。

藤陰の史論は、宋の太祖論である。太宗は曹彬・潘美に命じて江南を伐たせるに当たり、匣剣を曹彬に授けて、命令を聞かない者は副将でも斬るように告げ、潘美以下は皆、色を失った。大将という者は、人を服せしむる仁が必要であるが、人を懼れさせる威を備えなければならぬ。曹彬は、生来、仁徳あるので、太宗はこれに人を懼れさせる威を与えたのである。曹彬は、みだりに部下を殺す事なく、江南を破ったが、太祖の人を識る眼力は確かだ、と言うべきである。

六十九　大垣到着

十九、二十日。海鷗は、鉄心に従って家に帰った。

その鉄心は、十九日、正午近く、名古屋の大吉楼に飲んだ。森春涛が酒間に五絶句を作ったが、どの篇も皆傑作である。夜、小越駅に宿り、また舟を木曽川に浮かべた。水は果しなく、月が波に映じて、鉄心は大いに爽快になった。よっ

て思う、昨夜のような遊びは楽しい事は楽しいが、この遊びの浮世離れしているのには及ばない、と。午後二時頃、宿に戻った。

鉄心の史論は、毛利元就論である。毛利氏の祖（大江広元）は儒門から出ているので、その兵を用いるにも義を重んじている。元就が陶晴賢を討ったのが、義の最大なものである。晴賢は、その主の大内義隆を弑殺し、威を四方に張ったが、元就は微力をもって、これを討ったからである。およそ国に興亡があるのは、奪う事に基くのではなく、与える事に基くのである。元就が長門・周防の二州を取ったのは、陶氏が先に取って、これを与えたからである。後に毛利輝元が自ら禍いを招いて、六州の地を神祖（徳川家康）に与えたのであり、神祖が奪ったのではない。国を取り、国を与えるのは、義にこそ基くのである。

藤陰は、この日、朝、焼けるような暑熱の中を出発し、小越川に到ると、河原の砂石がすべて熔けるようである。夜になって墨股（すのまた）駅に投宿すると、藩の家臣、藩士の子孫・従僕などの出迎えの者が、続々と来り、旅の憂さはすっかり空しくなる。ただに馬に積んだ米袋が空になったばかりではない。

藤陰の史論は、宋の徽宗論である。「一指前に在らば、泰山も見えず」という諺があるが、姦臣が君の左右にあると、君の明を蔽う事は、一指の比ではない。徽宗は蔡京を用いたが、蔡京は帝に奢侈を勧め、土木を起し、正人を貶め、小人を近づけて、朝廷中が蔡京父子の党になった。末年、金が入寇すると、京城は陥落し、徽宗は流離し、ついに宋室は亡ぶに到るが、それも、徽宗が人一倍の才能がありながら、姦臣を委任したからである。

二十日、晴、鉄心は、氏共公の駕に殿して、大垣城に入る。

藤陰は、暁に出発し、大垣藩領に入ると、従臣はすべて行列に入り、整々粛々と進み、先払いの声は遠くまで聞える。沿道で迎え見る者は垣をなす中、午前十時頃、大手門に到着する。老臣以下、ひれ伏して出迎え、皷門を通って御殿に入った。

『亦奇録』下巻末には菅竹洲の「単歩登嶽記」が収められる。独り富士山に登った時の紀行である。それに拠れば、竹洲は、六月八日、鉄心に奉別して、藩邸を出発し、木下逸雲の寓居を訪れた。逸雲は富嶽を描いて、餞別とした。竹洲は、それを懐中して、四谷に出で、新宿・高井戸・布田の数駅を経て、府中に泊った。九日、玉川を渡って八王子に到り、小仏（こほとけ）駅から坂を上り、小原・与瀬・二瀬越・吉野・関野を経て、上野原に宿る。十日、上鳥沢から猿橋に行って橋を渡り、駒橋駅で昼食を取り、大月駅から上吉田に到って、神官田辺氏のもとに泊る。十一日、強力を雇って一合目から八合目まで登り、烏帽岩のもとで眠る。十二日、絶頂で日の出を眺め、下って九合目で弁当を食べ、足柄・芦高の間を通って、楡木橋で宿泊する。十三日、黄瀬川の上流を渡って沼津に出、鉄心の到着を待ったのである。

『亦奇録』における鉄心の史論を通読すると、鉄心が尊王論者であり、王権を奪った武家や弑逆を行う者に対して、筆誅を加えている事が明らかになる。源頼朝を未曾有の罪有りとし、北条氏を陪臣にして至尊を幽閉した者とし、応仁の乱の武臣を天子有るを知らざる者と論断し、陶晴賢を伐った毛利元就を義者としている点などに、その事が見出せるのである。かような鉄心が、それまで忠節を尽してきた徳川幕府が賊軍として位置づけられ、敵対してきた長州藩が官軍に成り変った時、理論的には、官軍としての長州藩に付かざるを得なくなるのであり、それは時間の問題なのであった。

七十　不朽殿の文宴

慶応二年の後半期は、大垣藩は、長州戦争において苦戦していた幕府軍の中で独り気を吐き、防州大島の戦や芸州大野村の戦で長州兵を迎撃し、九月、大垣に凱陣し、十二月、論功行賞を行なった（『新修大垣市史』通史編一、七七五頁）。しかし、鉄心や海鷗たちのこうした情勢に対応する動きを伝える資料は、まだ見出されていない。ただ、鉄心の「十月十三日、海鷗居に飲む、分ちて原字を得たり」（『遺稿』七）だけが僅かに二人のこの頃の動静の一端を垣間見させるばかりである。

欲慰此心来対樽　　此の心を慰めんと欲して　来りて樽に対す
暮鴉寒日乱荒原　　暮鴉　寒日　荒原に乱る
近聞天子連徴策　　近ろ聞く　天子　連りに策を徴むと
臣亦唇皮一片存　　臣も亦た　唇皮　一片存す

我が心を慰めようと思い、君の家にやって来て、酒を前にする。
寒い日で、夕暮れになって、鴉は荒原に乱れ飛んでいる。
最近は天子様がしきりに政策を臣下に求めていらっしゃると聞くが、
私も臣下の一人で、いささかなりとも申し上げたい策があるのだ。

鉄心には何か憤懣があったようで、それを晴らすべく海鷗の家を訪れたらしい。この頃は、幕府の権威が地に墜ち、朝廷では八月三十日、中御門経之・大原重徳らの王政復古派の廷臣二十二名が結党し、朝政の改革などを建言していたが、そうした情勢を聞き知ってであろう、鉄心も建言したい事があったようである。酒間、海鷗とそのような話題が取りかわされた事であろうか。

この頃、客好きな鉄心は、宋の王晋卿が蘇東坡以下、一時の名流十六人を西園に集めた故事を意識してか、文会を始めていた。それは、月に二度、朔日と十五日に文人墨客、その他士庶僧俗で詩文を愛好する者は誰でも拒まずに集めて、詩文を作る、という会であった。智独上人も文を好み客を愛する人であって、ある日、江馬金粟と野村藤陰を介して、文会の諸人をその不朽殿に招いた。文会の諸人と交を結ぼうとしてである。酒が数巡すると、ある者が杯を挙げて、皆に向って言った。

「昔、劉伯倫は、酒を止めると妻を偽って、またもや酔を尽した。李青蓮は酔に乗じて詔に応じ、高力士をして靴を殿上に脱がしめた。その「酒徳頌」と「月下独酌」の諸篇とを読むと、みずからを酒人と目してはいない。蘇東坡らも、ただに飲酒の間に流連するばかりの者ではない。その詩と文とは、一世を推倒するに足る。とすると、酒も、ただ飲んでばかりはいられない。諸君がそれぞれその得意の技を呈して、盛宴を飾るならば、単なる酒呑みには終らず、この会が遠く西園の伝統を継ぐものとなろう」

そこで、一同、詩を賦し、藤陰がその序を作った。

以上は、藤陰の漢文「冬夜、不朽殿に宴するの序」（『藤陰遺稿』三）に拠って述べたものである。この宴が開かれた時を、私は、慶応二年の十月十五日以降から、十二月十五日までの一日または十五日の事と考えるのであるが、それは、鉄心の「不朽殿の盛醼、分ちて於字を得たり」（『遺稿』七）が右の「十月十三日、飲海鷗居……」の直後、また「十二

月二十三日、暁に起きて雪を賞す、迂君と飲む、二首」（『遺稿』七）のすぐ前に配置されており、且つ、文会は一日と十五日とに開かれるのが恒例であるからである。鉄心の詩を読むと、

銀燭光揺和気舒　銀燭　光揺ぎて　和気舒ぶ
如雲勝友共相於　雲の如き勝友　共に相於す
空門一段佳風致　空門　一段の　佳き風致
座有娉婷盤有魚　座に娉婷有り、盤に魚有り

美しい燭台に火は揺らいで、なごやかな雰囲気に包まれ、
雲のように大勢の優れた友たちが、一緒に親しく交る。
仏寺に一しきり風流な趣きが生じて、
座にはしとやかな美女がおり、膳には魚が並んでいる

と、この宴は紅袖と生臭物とを排さなかったのである。

右に詩題を挙げた如く、十二月二十三日には雪が梅林に積って、暁から起き出した鉄心は迂石と雪を賞しつつ飲んだ。

（とくだ・たけし　法学部教授）